city & life

都市のしくみとくらし

no.119

Mar-Jun 2017

特集 「ゲストハウス」的まちづくり

city&life no.119 Mar-Jun 2017

巻頭言

「旅」と「町」の新たな関係

2016年11月、訪日外国人観光客数は、政府が2020年度の目標として掲げていた「年間2000万人」を早くも達成し、2020年度の目標は「年間4000万人」へと引き上げられた。

しかし、宿泊施設不足は大きな課題だ。一般の住宅に旅行者を宿泊させる「民泊」が注目され、2016年4月には、旅館業法施行令が改正されもしたが、現状では法令に合致した施設として申請するにはなかなかハードルが高い。

そうしたなか「ゲストハウス」が人気を集めている。ゲストハウスに厳密な定義はないが、一般に、ドミトリー型の素泊まりの宿で、ホテルや旅館に比べて宿泊費が安い宿のことを指す。ただし、ゲストハウスに集まる人々は、宿泊費が安いという理由だけでこれを選んでいるわけではないようだ。

しかも、ここ数年で増加している「ゲストハウス」の多くは、その主軸にまちづくりや地域活性化を置き、空き家・空き店舗をリノベーションした建物を使い、カフェやレストランを併設させることで、地域の人々との交流拠点機能を担おうとしている。イベント開催などを通じ、内外の人々に町の魅力を再発見してもらうような取り組みを行ってもいる。

ローカルとグローバルがつながる、個性的な「ゲストハウス」から、まちづくりへの新たな可能性を探る。（編集部）

表紙――「Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE」
裏表紙――「guest house MARUYA」
photo:坂本政十賜（関連記事:p8-24）

特集　「ゲストハウス」的まちづくり

contents

ルポ｜「ゲストハウス」は町に効く　2

ケーススタディ｜地域とつながる「ゲストハウス」　8

1.多様性と出会うために、ラウンジに宿を付けるという発想
Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE｜東京・蔵前

2.サスティナブルなまちづくり。その仕掛けとしての宿
YOKOHAMA HOSTEL VILLAGE｜神奈川・横浜

3.旅の経験を活かし、理想のライフスタイルを発信する場
亀時間｜神奈川・鎌倉

4.熱海にもう一つの日常をつくる、「二拠点居住」のようなゲストハウス
guest house MARUYA｜静岡・熱海

ルポ｜連携する地域と宿 アルベルゴ・ディッフーゾの可能性　25

連載｜スキマファイル⑩｜蒲田・鶴見、昭和の秘境駅。　30

連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く⑩　34

認定みどりこども園「全身を使ってダイナミックに遊ぼう!」
湘南まるめろ保育園「里山のなかの小さなおうち〈まるめろっぢ〉」

back number・information　38

ルポ

「ゲストハウス」は町に効く

外国人観光客の増加に伴い、日本各地で続々と誕生しているゲストハウス。その多くが交流の場となることや、地域とのつながり、地域の魅力の発掘や活性化を志向している。また旅行者側も、地域との交流や情報を求め、宿泊費の多寡にかかわらず、ゲストハウスを利用する人が増えている。実際のところ、ゲストハウスは町とどうかかわっているのだろうか？　地域融合型のおもてなしを掲げ、町に深く根付いた運営を実現している「ゲストハウス品川宿」を事例に、町とゲストハウスの関係性を探ってみたい。

取材・文:**村田保子** photo:**坂本政十賜**

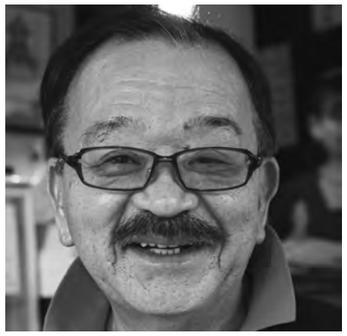
江戸と京都を結ぶ主要街道だった東海道。起点である日本橋から数えて最初の宿場町として賑わったのが品川宿だ。品川宿があったエリアは、現在の京浜急行の北品川駅付近から青物横丁駅付近で、旧東海道は当時と同程度の道幅の商店街になっている。昔の面影をそのまま残すというわけではないが、今時の飲食店に混ざり、歴史を感じさせる古い商店や家屋がぽつりぽつりと並んでいる。そんな町に「ゲストハウス品川宿」が、誕生したのは2009年10月のことだ。

建物は昭和20年代に建てられた元ビジネス旅館を利用し、大部分をオーナーやスタッフがDIYでリノベーションした。オーナーの渡邊崇志さんは現在36歳。もともとはホテルマン志望で、高校生の頃から都内の高級ホテルなどでアルバイトに励んでいた。大学生の頃、バックパッカーとして東南アジアを中心に15カ国ほどを一人旅した時、旅人同士の交流の場となっているゲストハウスを体験し、日本でこういう宿をやってみたいと考えるようになったという。

●「ゲストハウス品川宿」オーナーの渡邊崇志さん

まちづくりに参加して、一緒に汗をかくことから始める

「僕が旅をしていた時代は、インターネットがそれほど普及しておらず、人から情報を得ることが一般的でした。ゲストハウスのオーナーに質問して、仲良くなると一緒にご飯に行ったり、地元のコミュニティの飲み会に連れて行ってもらったりするようになり、友だちが増えてすごく旅が楽しくなる。でもよく考えたら、日本にもこういうコミュニティってたくさんあるんじゃないかと思ったんです。それを活かしてゲストハウスがやれたら面白そうだなと。学生の頃から北品川のアパートで一人暮らしをしていて、その大家さんが町の自治会長をしていたので、真っ先に顔が浮かんで相談しに行きました」



●「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会」会長の堀江新三さん（photo：佐藤真）

そう当時を振り返る渡邊さんは、自治会長を通じて、次々に町の顔役とつながっていく。そのなかの一人が「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会」会長で、江戸後期から200年以上続く酒屋（現在はスーパー）を代々経営している堀江新三さんだ。堀江さん自身も元バックパッカーで、ゲストハウスには馴染があった。さらに行政からも「急増する外国人旅行者が、低価格で長期滞在できる宿泊場所を増やしたい」という声が聞こえてきていた。

「ゲストハウスができて、町に外国人が増えたら面白いだろうなと感じ、可能な限り支援したいと思いました。でも、ビジネスとして成立させることは簡単じゃない。渡邊君が主体となってやること、自分で資金を準備することが必要だという話をしました。商売をするうえで、自分でお金を出さないと見えてこないことはたくさんあります」

そう話す堀江さんは、渡邊さんにまずは町のなかに入って、まちづくりに参加するように勧めた。渡邊さんは、まちづくり協議会のボランティアスタッフとして、昼は町の人たちの交流の場である「品川宿交流館」に常駐し、夜は堀江さんのスーパーで働きながら、ゲストハウス開業のための準備を進めることになる。祭りなどの行事を手伝ったり、さまざまな会合に参加したりしているうちに、町の人たちに顔を覚えてもらい、住む場所や食事の心配までしてもらえるように。まちづくりにかかわる人や行政とも関係性が生まれ、前出のビジネス旅館が廃業し、物件が賃貸に出ているという情報をいち早く得ることができた。

「オーナーさんからは個人に貸すことは難しいと難色を示されたのですが、堀江さんが保証人を引き受けてくれることになり、了承が得られました。資金集めも四苦八苦。商店街をあちこち回っていろいろな人に相談したら、出資してくれるという声が出てきて、うれし泣きしながら開業しました」と渡邊さん。

「ゲストハウス品川宿」は、外国人をターゲットとしたゲストハウスという新しい形態の事業にもかかわらず、町からの反対意見や不安などの声は挙がらず、町の人たちの多くはむしろ歓迎し、協力や支援を惜しまなかった。それは、渡邊さんの人柄や熱意があってこそではあるが、堀江さんのサポートのもと、渡邊さんがお祭りの手伝いなどに積極的に参加し、町の人たちと一緒に汗をかくことから始めたことで、信頼や理解を獲得できたことも大きい。さらに、品川の町の人たちの器の大きさもあるようだ。

「品川は外から入ってくる人を歓迎する雰囲気がある町です。歴史的にも街道沿いにあって、旅人を受け入れて成

●「ゲストハウス品川宿」の外観。旅行者の声を収集する目的で、自主的にツーリストインフォメーション「問屋場」を併設

●部屋のタイプは、個室、2人部屋、ドミトリーなどさまざま。既存のビジネス旅館の間取りを活かし、壁を塗ったり、壁紙を張ったりして、明るく清潔感のある雰囲気につくり変えている

●コモンルームでチェックアウトまでの時間を過ごすゲストたち。英語が話せないという日本人女性とアルゼンチンから来た女性が、翻訳サイトを駆使した会話で盛り上がっていた

り立ってきたから、そういう土壌があるのだと思う。外国人がいたら、英語がわからなくても話しかけるおせっかいなおじさんはいっぱいいますよ。ゲストハウスができたことで、周囲の店にもお客さんが増えているし、飲食店でも英語のメニューをつくって対応したりして、町が盛り上がっているのを感じます」と堀江さんは分析する。

ゲストハウスをきっかけに まちづくり人材が姿を現す

渡邊さんが構想した「ゲストハウス品川宿」の運営方針は、「小さな宿の感動から地域と世界をつなぐ」というスローガンに凝縮されている。

●旧東海道沿いには、歴史ある寺社や古い家屋なども多く残る。写真は品川宿本陣跡。現在は公園になっている

「宿のつくりはシンプルにして、近隣の飲食店や銭湯をおすすめし、町のサービスを使ってもらえるように働きかけています。長期滞在していると最初は観光地に出かけても、そのうちに宿の周辺で遊ぶことが多くなります。僕が海外から帰ってきた時、バックパッカー感覚で歩いた北品川は、日本の普通の生活が色濃く残り、ちょっとした旅心がもてるエリアだと感じました。そんな地に足のついた北品川の魅力と、旧街道沿いというストーリー性、羽田や成田から近く、どこに行くにも便利な立地を活かし、外国人が最初に泊まる日本のウエルカムゲートとして、町全体を盛り上げていきたいと考えました」と渡邊さん。

もう少し広い目線では「多文化共生社会の実現」という目標もある。多様な人種が出入りするゲストハウスの運営を通じて、北品川を多文化共生の先進地域にしていきたいと渡邊さんは考えている。

「外国人が増えることによって生じる問題を解決し、外国人に対する世代間や地域間のギャップをなくしていきたいと思っています。宿のスタッフや町会のメンバーが外国人だったりする社会も現実的になりつつあるので、僕たちの世代で、日本に多様なものを受け入れる文化をつくっていきたいんです」

●フロント近くの通路の壁。周辺のおすすめの店などの情報を手書きのMAPで紹介。ゲストの出身国にピンが刺さった世界地図も

宿泊客と地域の交流を促すために、渡邊さんやスタッフたちは、宿泊客と意識的にコミュニケーションを取るようにしている。そして、お客さんから吸い上げた情報を、近隣の店にもフィードバックしていく。お客さんから「あそこの店が美味しかった」と聞いたら、渡邊さんたちから挨拶やお礼を伝えに行くことで、店主とも仲良くなる。お客さんを介して、近隣とのコミュニケーションが広がっていくのだ。

古着を中心に扱うリサイクルショップ「paris madonna」を経営する合谷（ごうや）恵美さんとの出会いも、近隣とのコミュニケーションを深めるなかで恵まれたご縁の一つ。

「店に外国人のお客さまが増えたから、英語を話せるようになりたいと思って、商店街の仲間から聞いたゲストハウスに遊びに行くように。ゲストの外国人と話しているうちに、コミュニケーションには困らない程度にまで上達しました。今では仲良くなった外国人をボランティアで東京タワーに連れて行ったり、空港まで送っていくこともあります」

そう話す合谷さんは、北品川で店を開いて30年になるが、「ゲストハウス品川宿」とかかわるまで、商店街の活動には興味がなかったという。しかし、渡邊さんやスタッフたちと仲良くなるにつれ、周囲の声が耳に入るようになり、近隣の子どもをもつ母親からの希望に応え、「品川キッズハロウィンパレード」を主催するようになった。2015年にスタートしたこのイベントは、第2回目の昨年、350人以上が参加する活気あふれるものとなり、今年も第3回目を開催する予定だ。

合谷さんのように、今までは町の活動にかかわっていなかった人たちが、

●渡邊さんは現在、「品川宿」の他にも、二つの一軒家ホテルを経営。写真は自分があったらいいなと思う理想の宿を形にしたという「Bamba Hotel」。古民家長屋を改装した情緒のある空間

左●ゲストハウスの近くでリサイクルショップ「paris madonna」を営む合谷恵美さん
上●合谷さんが経営するリサイクルショップ「paris madonna」。ゲストハウスから200mほどの距離。取材時も外国人旅行者が買い物を楽しんでいた

ゲストハウスが誕生したことをきっかけに、まちづくりに参加するようになったという変化は、堀江さんからも聞くことができた。

「ゲストハウスの前に外国人がいるのを見て、近隣に住む若者たちが興味をもち、スタッフに話しかけたりすることで渡邊君とつながり、まちづくり協議会の活動に参加してくれるようになった例がいくつもあります。音楽家や写真家など多彩な才能をもつ人も多く、その人たちが中心となって商店街の情報誌をつくるなどの実績も生まれています」

潜在的な人材が表に現れ、まちづくりに参加するようになったことは、古くから町の発展に力を注いできた堀江さんたちにとって、想像もつかなかった大きな恩恵となっている。

ゲストハウスの成功には、地域とオーナーの個性が必須条件

宿泊客と近隣の商店、さらにはまちづくり人材など、町と人を結ぶ拠点となりつつある「ゲストハウス品川宿」。その源泉となっているのは、渡邊さんやスタッフたちのコミュニケーション能力の高さだ。ことあるごとに親しみをもって宿泊客に話しかけ、コモンルームに人がいる時は、場を盛り上げる雰囲気をつくる。フレンドリーではあるが、交流を押し付けることはなく、心地よい距離の取り方を心得た接客が徹底されている。スタッフのなかには、将来は地元に戻ってゲストハウスを開業したいという人や、まちづくりを仕事にしたいという人も多い。渡邊さんによれば「将来、自分が宿をやったらという目線で、自分事として考えてくれるから、モチベーションが高いスタッフが多い。盛り上がりすぎる場を収めたり、話したくない人を見分ける判断などは経験値なので、やっていくうちに身に付いていく」ということだ。

「ゲストハウス品川宿」でスタッフとして働いた後、地元に戻って宿を開業する。渡邊さんはこの流れを「宿場JAPAN」という名称でプロジェクト化した。働きながら運営のノウハウを学び、その間に渡邊さんが支援をしながら、開業を目指す地域とのつながりを構築し、事業計画を立てる。

「宿場JAPANのようなコミュニティがあれば、宿をやりたい若者と、地域の自治体やまちづくり団体がつながりやすくなる。僕自身がたくさんの人の力をお借りして開業したから、次にやる人に還元していきたいという思いもあります。資金、物件、地域社会の人脈を整えたうえで開業することは、ゲ

ストハウスをビジネスとして成り立たせるために欠かせないプロセスだと思います」

身をもって経験した渡邊さんならではの言葉だ。

「宿場JAPAN」で修業したスタッフによる第1号のゲストハウスは、蔵を中心とした町並みが残る長野県須坂市で2012年4月に開業し、順調に経営を続けている。ゲストハウスがオープンした後、近隣の空き家を改装した飲食店などが続々と増え、小さな町が活気づいているという。

現在、日本各地で地域おこしの手法として、ゲストハウスが取りあげられることが多く、渡邊さんもアドバイザー的な位置付けで、各地のプロジェクトに参加している。

「ゲストハウスがブームになっていて、大手資本が参入し、ビジネスライクな宿が増えているから、今後ますます差が出てくると思います。普通のゲストハウスでは生き残れないから、求められるニーズに合わせ地域のポテンシャルを上手く引き出し、オーナーの個性やユニークさを表現して特徴付けをしていくことが必要になってくるでしょう。ゲストハウスが地域と融合して成功するための条件は、地域として魅力があること、祭りなどの地域活動をやっている人たちがいること、その人たちの協力が得られることが考えられます」と渡邊さん。

日本中が地域創生で盛り上がっているが、ゲストハウスによる地域活性は、決してどの地域でも通用するわけではない。たとえば、ショッピングモールが生活の中心になっているような地域では個性を出しづらい。また、都会で「ゲストハウス品川宿」のような宿をやろうとしても、合意形成を取るのは容易ではなく、競争が激化しているなかで採算をとるのは難しい。しかし渡邊さんの言葉には可能性が感じられる。「日本全国に目を向けて掘り起こせば、海外から見て魅力的な地域はまだまだたくさんあると思います。田んぼの隣の農家の縁側でおばあちゃんがお茶を飲んでいるようなシーンは、放っておけば10年後には消滅してしまうのではないでしょうか。若い人たちの目が地方に向いている現在は、そのようなシーンを引き継いでいくチャンスであり、彼らが最後の生命線です」。

「ゲストハウス品川宿」と北品川の町の関係性から見えてくる現象としては、ゲストハウスは町に人を呼び寄せ、交流を促し、地域経済への波及を生み出す。さらに、潜在的なまちづくり人材を顕在化させる。地域活性化やまちづくりのためにゲストハウスをつくることには、一定の効果が期待できるだろう。しかし持続可能な経済活動を維持するためには、ゲストハウスが、地域のあるがままの営みと共に存在し、町の代表として時代に合わせたプレゼンテーションをしていくことが必要になる。それを可能とする地域とオーナーの組み合わせが成立した時、ゲストハウスは町に効くと言えるのではないだろうか。

宿泊レポート「ゲストハウス品川宿」

「ゲストハウス品川宿」に実際に宿泊してみた。コモンルームでの交流、ドミトリーの様子、北品川の町歩きなどをじっくりと味わい、ゲストハウスの泊まり心地を体感したい。

文:**村田保子** photo:**村田保子/坂本政十賜**（*）

チェックイン時はおすすめスポットを丁寧に紹介

●チェックインは16:00から。早めに着いた時は荷物を預かってもらうことも可能。宿の設備や近隣のおすすめの店などを、スタッフが詳しく説明してくれる。玄関が施錠される22:30以降の対処方法も教えてもらう。

泊まるのはドミトリー。ベッド一つが占有空間

●ドミトリーは男女別。一番大きいタイプで定員は4名。布団、枕、シーツが準備されており、ベッドメイクは自分で。マットはふかふかで寝心地は抜群。同室には長崎からオーディションのために上京していた女優志望の女性とアジアからの旅行者が宿泊。

コーヒーやお茶の無料サービスあり。冷蔵庫や電子レンジも使える

●館内を一通り見て回る。コモンルームでは7:00～22:00までコーヒーとお茶のサービスが。共有スペースに冷蔵庫、電子レンジ、トースター、電気ポットなどの設備も充実。アルコールの持ち込みもOK。宿泊者が置いていったボトルは自由に飲める。

●館内の至るところにわかりやすい手書きサインが施されている。英語の説明もしっかり書かれている。（*）

近くのブックカフェで一休み。旅好きにはたまらない空間

●少し時間があるので、近くにある「KAIDO books & coffee」でスペシャルティコーヒーをいただく。旅をテーマにした書籍が1万冊以上並ぶ。「他の地域とつながる場所をつくりたい」と話す店主の佐藤亮太さんも、北品川のまちづくりを担う若手の一人。

夕食は少し足を延ばして五反田でステーキを食べる

●宿に戻ると、宿泊者のOさんがコモンルームに。これから友人とステーキ激戦区の五反田に食事に行くという。会話の流れでご一緒することに。Oさんの友人も合流し、話題のステーキを食べる。近隣エリアにすぐに出られる便利な立地も魅力的。

初対面でも旅話で盛り上がる。ゲストハウス的な風景

●再び宿に戻ると、宿泊者の女性と交代前の宿直スタッフがお茶を飲んでいた。Oさんと共に会話に加わる。仕事で広島から上京していた宿泊者の方は、アットホームな雰囲気が好きで、あえて宿泊先にゲストハウスを選んでいるという。

起床後、朝の旧街道を散歩。路地に迷い込むのが楽しい

●思わず寄り道したくなる魅力的な路地がたくさん。外国人や地方から来た日本人は、博物館に来たような感覚で面白がるという。（*）

●寺社も多く、見どころは満載。上は旧東海道沿いにある「一心寺」。（*）下はパワースポットとして知られる「品川神社」の富士塚の頂上からの風景。

●路地を入ると古いレンガの塀が連なり、情緒のある風景が現れる。周辺には手押しポンプの井戸なども多く残る。（*）

入浴はいろいろなタイプがそろう銭湯がおすすめ

●ゲストハウスにもシャワーや風呂が完備されているが、徒歩圏内には銭湯が3軒もある。時間が遅くなってしまったので、24:00まで入場できる「天神湯」へ。黒湯の天然温泉を堪能。写真は一番近い「吹上湯」の煙突。（*）

●「ゲストハウス品川宿」は旧東海道沿いの商店街に位置する。新旧の店舗が並ぶ様子は、どことなく歴史のある町の雰囲気をたたえている。（*）

古い民家を改装したカフェの優しいランチで締めくくり

●チェックアウト後は荷物を預かってもらい、お昼前まで町を散策。古い民家を改装した「クロモンカフェ」でランチをいただく。玄米と季節の野菜、魚などが中心のメニューが、優しくからだに染みわたる。

チェックアウトは10:00。スタッフが笑顔でお見送り

●あっという間にチェックアウトの時間に。スタッフが外に出て、手を振って見送ってくれる。仲良くなったスタッフとの別れを惜しむように、記念写真を撮るゲストも多いという。

ケーススタディ

地域とつながる「ゲストハウス」

**ゲストハウスとは一般に、ドミトリー型の素泊まりの宿とされている。
では具体的に、どのような宿泊施設なのだろうか。
また、旅行者が一時を過ごす宿泊施設が、町や地域の魅力を発信し、
地域活性化やまちづくりを促すことは本当に可能なのだろうか。
いくつかの宿を訪ね、その実像を探る。**

1 多様性と出会うために、ラウンジに宿を付けるという発想

取材・文:**杉山衛** photo:**坂本政十賜**

Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE 東京・蔵前

宿と音楽とお酒を武器に、世界をまぜる

ゲストハウス「Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE」は、外国人観光客に人気の高い浅草から南へ徒歩約15分、蔵前の駅近くに位置している。まずこの立地が非常に良い。蔵前は都営地下鉄浅草線と大江戸線が交差しており、銀座、新宿、六本木など、都心の主要な観光地への交通も便利だ。この辺りは、かつて「蔵前玩具問屋街」と呼ばれた場所で、年々その数は減りつつあるものの、町を南北に走る江戸通りには、今も昔ながらのおもちゃ問屋が残る。Nui.はそんな表通りと隅田川に挟まれた町の一角、元おもちゃ会社の倉庫だったという6階建てのビルを改装して、2012年にオープンした。

通りに面した全面がガラス張りの開放的な雰囲気の1階は、ワンフロアまるごとがカフェ＆バーラウンジとなり、入り口に宿のレセプション、左手には壁面に酒瓶を並べたバーカウンターが見える。2階以上が宿泊スペースで、女性専用を含む八つの8人用ドミトリー（相部屋）、ツインとダブルの個室を合わせて、約100床のキャパシティーをもつ。各階にはシャワー室とトイレを配し、最上階には隅田川を望む宿泊者用のライブラリーと自炊ができるキッチン、ランドリースペースも備えられている。

「大学3年次に1年かけてオーストラリアを一周し、ゲストハウスを泊まり歩いたことがとても面白くて、それが原体験となりました。会津若松出身で、大学も福島。県から出たこともない田舎の若者がいろんな人と出会って、世界にはこんなにもいろんな人がいるのかと大きな衝撃を受けたんです」と語るのは、Nui.を経営する（株）Backpackers' Japan代表取締役／CEOの本間貴裕さん。

●Nui.を経営する（株）Backpackers' Japan代表取締役／CEOの本間貴裕さん

帰国後、日本にもお酒を飲みながら語り合えるような宿泊所をつくろうと、同年代の仲間4人で起業し、2010年、東京・入谷に築約100年の庭付き古民家を改装した「toco.（トコ）」を開業した。創業者の4人全員が24歳の若さで、手探りのスタートだったという。そのコンセプトは、「宿と音楽とお酒を武器に、世界をまぜる」。当時はまだ本格的なバーを併設したゲストハウスは珍しく、toco.は日本のゲストハウスのシンボルとなるほどの人気を博した。蔵前のNui.はその2号店ということになる。

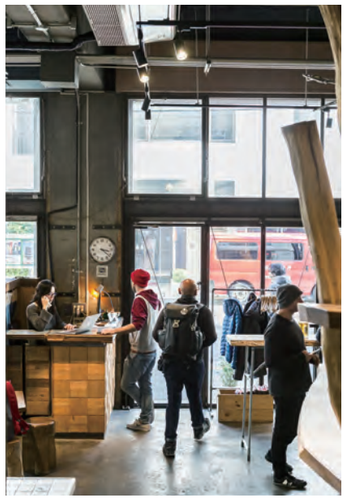
●全面ガラス張りの開放的なNui.のエントランス。観光の足としてのレンタサイクルも用意されている

人と人とが出会い、集うためのデザイン

住宅地の民家を改装したtoco.では、近隣の迷惑になるため肝心の音楽ができない。そこで、音楽ができる物件を探して巡り合ったのがこの蔵前のビルだった。とくに1階フロアの高い天井、風通しと日当たりの良さに一目ぼれしたという。本間さんたちはその1階のフロアすべてをカフェ＆バーラウンジに改装した。

内装は友人のデザイナーと、全国から集まった約15名の大工たちとの共同作業で手がけており、このNui.でも1号店のtoco.同様自分たちでつくる姿勢を堅持している。Nui.という名も手縫いの「縫い」から名付けられたというくらい、手づくり感を大切にする。そのデザインのコンセプトは「北の自然」。大工メンバーのうち2人が北海道出身だったこともあり、木材も北海道産を使用している。

「僕たちの会社は、〈あらゆる境界線を越えて、人と人とが集える場所を〉という理念を掲げてホステル（ゲスト



左●1階ラウンジでは、外国人宿泊客がジョッキビールを楽しんでいた
上●入り口すぐの位置に置かれたレセプションカウンター。こうしたゲストハウスでは、ごく自然に英語が公用語となっていくようだ

上●入って左側の壁面にはバーカウンターと、軽食を用意するキッチンカウンターが置かれている
右●ラウンジの右側。手前が段差下のウッドデッキのフロア。奥が段差上の室内をイメージしたスペース。客はゆったりした空間で思い思いにくつろいでいた

ハウス）を展開しています。国籍や職業にかかわらず、人と人とが出会って語り合う場所。それにはやっぱり自然のなかがふさわしいよね、と考えてこの空間をつくりました」と本間さん。

1階のフロアには中央に印象的な大きな段差がある。倉庫時代には、商品の積み下ろしのためのトラックの寄り付きに使われていた段差だ。ラウンジはこの段差をうまく利用しながら、下の入り口まわりはウッドデッキのフロアに、段差の上はクジラのあばら骨のようなデザインの天井がかかる室内をイメージした空間と、木のオブジェや小屋の外壁があしらわれた屋外の風景をイメージした空間という、三つのユニークな空間が表現されている。

上下段をつなぐ中央の階段にニョッキリと立つ木のオブジェは、参加した大工の発案でバーカウンターの残り木を使ってつくったものだそうだが、バーの止まり木ともなり、空間にシンボリックな印象を与えることにも成功している。音楽ライブでは、この1階フロアのさまざまな場所がステージとなり客席となる。

「普通なら出会わなかったはずの人たちがここで出会い、同じ時間を一緒に過ごす。彼らが自然に話しかけられるような、そんな空間にしたかった。語り合うことで価値観を共有したり世界観を交換して驚きを与え合う空間。そのためのデザインです」と本間さん。こうしたデザインマインドはNui.全館に行きわたり、温もりのある空間を実現している。

さまざまに違う個性が同居できる場所

すべての店舗を同じようにデザインすることで、ブランドイメージを確立する方法もあるが、Nui.はtoco.とは違う個性をもっている。ゲストハウスを始めるにあたって、本間さんたちは手分けして国内外の100カ所以上の宿泊施設をたずねて調査し、自分たちの方向性を模索した。そして便利で安いことと共に、「宿を愛する人の存在」が重要だと考えた。

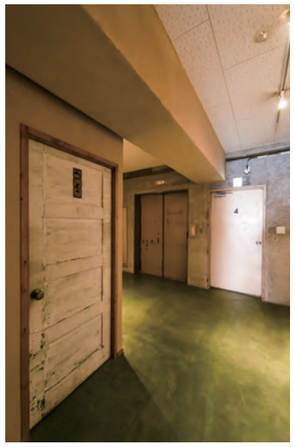
「どの店でも同じ対応がある安心ではなく、それぞれに面白いお店にしたかった。スタッフには〈Nui.で働いている〉という意識を強くもってもらいたい」と本間さん。2015年には京都に3号店「Len」がオープンし、17年3月には東京・東日本橋に4号店「CITAN」がオープンしたばかりだが、その展開にも個性のあるゲストハウスを心がけたという。

今ではほとんどの宿泊客がインターネットを利用した予約のため、ウェブサイト以外のプロモーションは行っていない。それでも個性的で楽しい宿があれば、宿泊者自身がフェイスブックやツイッター、インスタグラムで評価を拡散してくれるため、その口コミだけで、稼働率は8割から9割を確保できているという。利用者の約8割が外国人、アジアでは台湾からの客が多い。

というのも、日本の観光業界が大きなターゲットとしている中国人は、ツアーに組み込まれた大手のホテルチェーンの利用が多く、Nui.の利用者には個人旅行に慣れた人が多いからだ。そのため欧米人の比率が比較的高く、外国人利用者のほぼ半数が欧米人だという。その客層は時期によって異なり、冬場は、ちょうど今夏を迎えているオーストラリアの人たちが、スノーボードを楽しみに来ることも多いという。東京にスノボをしに来るとはちょっと意外だが、彼らはNui.を拠点に東京観光を楽しみ、飛行機で北海道に飛んでウィンタースポーツをして戻ってくるといったように、その遊び方のスケールも日本人とはちょっと違う。そんな違いと出会えるのもNui.の面白いところだ。

「遊び方もお酒の飲み方も、音楽の聞き方も、みんなそれぞれ違うんです。欧米人の力の抜けた楽しみ方には、ずいぶん学ぶことも多いですよ（笑）」と本間さん。

ゲストハウスというかたちは、さまざまな違いを同居させる場として有効だ。1階のゆったりとしたラウンジでは、とくに告知しなくても、靴を脱いで座り込んだり、ソファに寝転がったりできる雰囲気が、自然に共有されている。わざわざNui.を選んで来ているということで、ここの宿泊者は、他者に対して開かれた人たちだと了解できる安心感がある。とりわけNui.は、この大きなラウンジを広く開放することで、プライベートを守るということよりも、「何か楽しいことはないかな」と期待するような、オープンマインドの若者たちを世界中から呼び込んでいるのだ。



左●元はワンフロアの倉庫を壁で区切り、客室やシャワーなど付属施設のスペースを確保。全体がレトロなカントリー調でまとめられ、落ち着いた雰囲気を醸し出す
上●各階の東側にある隅田川を望む「リバービューダブルルーム」。この最上級の部屋で1泊8800円、1人あたり4400円（2017年3月現在）とリーズナブルな価格だ

世界に開かれた「町」の表明として

かつては玩具の問屋街だった蔵前は、今、若いクラフト職人などが経営するおしゃれな店が増えているという。大きな商業施設や観光地こそないが、路地に入ると昔ながらの職人の工房や新しい喫茶店があったりと、歩いて楽しい町になっている。観光地化されていないぶん、普段着の日本に出会える町として、宿泊者にも好評だ。

●6階建ての最上階に用意された宿泊客用ライブラリー。右手の奥には自炊ができるキッチンが備えられ、気の合った宿泊客どうしで夕食会もできる

本間さんたち新規参入組も地域の人たちと共にイベントを開催するなど、問屋街の面影は残しつつも、時代に沿って町は確実に変わりつつある。夜25時まで営業し、地元の人たちも多く利用するNui.のラウンジは、そんな地域の止まり木の役割も果たしている。客の6、7割が宿泊しない一般客というこのラウンジは、宿泊客と一般客が交差する、町にとってはちょっと異質な場所だ。しかし、全面がガラス張りの見晴らしの良いファサードを通してこうした交流が見えることで、地元の人たちにも利用しやすくなった。

「宿屋というよりはラウンジ屋という感覚ですね（笑）。ドミトリーでも交流はできますが、宿泊施設はむしろラウンジに人を集めるための仕掛けの一

つだと考えています。宿泊施設だからこそ世界中から人が訪れる。けれど〈まざる〉場所はやっぱりこのラウンジなんです」と本間さん。簡易な宿泊所では飲食を扱わない方が負担やリスクも少ないのだが、第1号店toco.の内装に参加した大工の提案に押し切られるようにして飲食を始め、やがてそれが宿の主要なコンセプトになっていった。

今は、宿がもつ役割が世界的に変わってきているという本間さん。そもそもホテルの起源には、貴族階級がどこに行っても自宅にいるのと同じ快適性を保つことができるという前提があった。しかし今の旅行者は、非日常的な多様性や地域の人たちとの触れ合いをより強く求めるようになってきているという。安全や安心を担保するだけではなく、宿泊施設もそれに応じて変わっていく必要がある。

将来は海外にも出店していきたいと語る本間さん。日本ではゲストハウスという業態も若く、本間さんたち経営者も、またNui.で働くスタッフも若い人が中心だ。しかし今後はさまざまな国籍のさまざまな年代の人をスタッフに招き、まず自分たち自身が多様性を獲得しようと考えている。「宿があることは、この町が世界に開かれていることの表明です」という本間さん。彼らが運営するゲストハウスは、世界に向けた「町の顔」なのだ。

2 サスティナブルなまちづくり。その仕掛けとしての宿

取材・文:**杉山衛** photo:**坂本政十賜**

YOKOHAMA HOSTEL VILLAGE 神奈川・横浜

●日本三大ドヤ街の一つ、寿地区にあるYOKOHAMA HOSTEL VILLAGEのレセプションオフィス。宿泊客はここから町に点在する客室へと案内される

簡易宿泊所の空き部屋をゲストハウスに

「YOKOHAMA HOSTEL VILLAGE(以下、ホステルヴィレッジ)」は、横浜観光の目玉である中華街や元町の玄関口ともなっているJR石川町駅から、徒歩5分ほどの寿(ことぶき)地区の一角にある。この地区は日雇い労働者の町として知られ、東京の山谷、大阪のあいりん地区(釜ヶ崎)と並ぶ日本の三大「ドヤ街(寄せ場)」の一つとも数えられている。ホステルヴィレッジのレセプションは、寿地区の南端のやや広い通りに面し、散歩する老人の姿が少し多いかなと思うくらいだが、通りを入るとさまざまな世代の人びとが道端にたむろし、彼らが常宿とする簡易宿泊所が軒を連ねる独特な風景が広がる。この日は公園で昼食の炊き出しが行われ、園を取り巻くようにして長い行列ができていた。いったいなぜここで、ゲストハウスを開こうと考えたのだろうか。

ホステルヴィレッジを運営するコトラボ合同会社の代表・岡部友彦さんは、大学と大学院で建築科に在籍し建築や都市計画を学んだ。院在籍中に近くでプロジェクトを行ったことをきっかけに寿地区と出会ってこの町の面白さにハマり、修了後の拠点をここに決めたという。「危ない、怖い、というネガティブなイメージで語られる寿地区が、実際には下町っ子のような気さくな人が多く、外から来る人を暖かく迎え入れるようなやさしい一面もあって、そのギャップが不思議でした」と岡部さん。まずはそのギャップを埋めようと、2005年、簡易宿泊所を利用したこのゲストハウスを開業した。

●一本路地を入ると、簡易宿泊所が建ち並び、老人の姿も多く見られる寿地区の風景

●YOKOHAMA HOSTEL VILLAGEを運営するコトラボ合同会社の代表・岡部友彦さん

かつては日々の仕事を得るために労働者たちが集まった寿地区。しかし、近年の産業構造の変化や高齢化によって活力を失い、2005年当時には、簡易宿泊所にも空き部屋が目立つようになっていた。岡部さんは、こうした空き部屋を抱える簡易宿泊所のオーナーと長期的な事業連携の契約を結び、最低限の改装を加えて、建物単位、フロア単位でゲストハウスに活用しようと考えた。岡部さんのアイデアと対外的に発信するソフトが、客室というハードをもつオーナーとつながって生まれた、新しい事業のかたちだ。オーナーとの連携状況により部屋数の変動はあるが、空き部屋さえあれば規模の拡大も比較的容易だ。元がドヤ街の簡易宿泊所なので、客室もそのまま3畳1間。多少手狭だが、テレビもあって1泊3100円からという低料金が好評で、20室からスタートしたホステルも現在は合わせると60室ほどに増え、年間1万人以上が利用する人気の宿となっている。

新しい人の流れが閉鎖した町を開く

宿泊客は、サロンを併設するレセプションオフィスでチェックインして、指定された別の建物にある客室へと移動する。当初はドヤ街を歩いて客室に移動させることに危惧する意見もあったが、予備知識のない宿泊客が多少驚くことはあっても、オープン以来10年以上、問題らしい問題は起こっていない。ただ今のところは町と宿泊客の双方に配慮して、ゲストハウスにはオフィス近くの比較的明るく広い通り沿いの物件を選んでいるという。

その一つ、道を挟んでオフィスの向かいにある客室に案内していただいた。簡易宿泊所「林会館」の最上階、5階フロアがホステルヴィレッジとなっており、廊下を挟んで20室が並ぶ。古い建物なのでエレベーターはないが、通り側の階段近くには夜間にスタッフが駐在する部屋があり、奥には「無料」と大きく書かれたシャワーやランドリーも完備されている。ホステルの客のためにオーナーがつくってくれたという屋上庭園も居心地よく、屋上へのぼる階段には、やはりオーナーが選んだという絵画や置物も配されている。そのセレクトは決して垢抜けてはいないが、「おもてなし」の心配りがほのぼのと伝わってくる。

ホステルヴィレッジがもたらした新しい人の流れは、建物の雰囲気ばかりではなく、町なかに身だしなみに気をつける人が増えたり、至るところに放置されていた粗大ごみがなくなるなど、この町の閉鎖性を開き、環境を徐々に変えつつあるという。

「スタッフや宿泊客に若者が多いことが良いようです。彼らとお友だちになりたい地域の人たちがちょこちょこ顔を出してくれるようになり、2014年からは、彼らに仕事として清掃作業を手伝ってもらっています。若い人たちと交流できることが、仕事を長続きさせるモチベーションを生んでいるようです」と岡部さん。

ずっと都市計画を学んできた岡部さんはホステルヴィレッジの経験を通して、建物や施設というハードウェアによる再開発ではできない、ソフトウェアから都市を変えていく新しい可能性を再発見したという。

住む場所、働く場所をつくり地域を支援する

現在の寿地区には約6200人が住んでおり、その多くが生活保護を受ける人びとで占められている。さらに65歳以上を指標とする高齢化率も全国平均を大きく上回り、労働者の拠点というよりは、町全体が巨大な福祉施設のような印象だ。

しかし若い人たちと一緒になって働けるコミュニティがあれば、この町にも働き続けるモチベーションが生まれるに違いない。岡部さんは今、近隣に増えつつある空き家を利用した定住型の施設の展開にも力を入れ、働こうとする意欲のある人たちに安く良好な住環境やハードルの低い働くきっかけを提供する試みも始めている。現在それは2棟の賃貸アパートとして実現している。

またもう1棟は、10年ほど空き家

●レセプションオフィスの向かい側、YOKOHAMA HOSTEL VILLAGEが入る簡易宿泊所、林会館

だった木造アパートを改装し、定員5名のシェアハウスとして貸し出されている。古い木造ならではのレトロな魅力を残しつつ、各部屋は地元のアーティストの協力を得てそれぞれ個性的な内装が施され、ちょっとおしゃれなペンション風や、アーティスティックな空間へと仕上がった。ホステルヴィレッジからは川を挟んで南側の、小高い丘の上にあり、改装にあたっては、ランドマークタワーが見える眺望を生かしたテラスも設えられ、「ブラフテラスヨコハマ」と名付けられた。

居住者にとってはリビングともなる1階の共有スペースは、テラスと共に毎日夕方5時までは喫茶店として貸し出されている。シェアカフェという形式で、共通のメニューを用意しながらも曜日ごとに募ったオーナーが、それぞれ日替わりでこの小さなカフェを経営する。だから店の名も毎日変わり、それぞれの個性が楽しめる。自分でカフェやレストランを開店するのは難しくても、シェアカフェなら気軽にその一歩が踏み出せるというわけだ。ここから将来の有名店や人気店が生まれていくかもしれない。

「やっていく自信がついたところで他の空き家を改装して自分のお店をもてば、地域の魅力も増え、空き家の活用にもなっていく。空き家活用だけを考えるより、空き家の担い手をどうつくっていくかが重要だと思っています」と岡部さん。現在の3棟はいずれも入居者が決まり今のところ空きはないが、こうした定住型の施設が増えていけば、ホステルヴィレッジを訪れてこの町が好きになった人たちの、格好の受け皿ともなるだろう。

上●手づくりで飾りつけられた林会館5階のYOKOHAMA HOSTEL VILLAGEフロアとその客室。3畳1間の各部屋には冷暖房とテレビが完備されている
右●オーナーがYOKOHAMA HOSTEL VILLAGEの宿泊客のためにつくってくれた屋上庭園

地域の資源を活用し、生業（なりわい）にできるまちづくりのために

「すでにある地域の資源は、有効に使った方が良い。たまたま寿地区は簡易宿泊所の町だったからホステルを始めたのですが、新しい人の流れやコミュニティも生まれ、まちづくりにはピッタリでした」という岡部さん。ここを拠点とした当初は漠然としていた「町」への思いは、ゲストハウスの運営を通して、「空き家」など地域の資源を有効利用しながら人を巻き込んでいくという、まちづくりのノウハウへとかたちをなしてきたようだ。

そのノウハウを生かして2012年から手がける愛媛県・松山市の古い港町、三津浜のにぎわい創出事業では、築90年ほどの木造の病院を改装し、一つひとつの部屋を店舗としてレンタルする事業を始めているという。シャッター街化が進む商店街に地域の資源を再生した新しいシンボルをつくることで、活性化をめざす。さらに3年ほど前からは、松山市から受託して「空き家バンク」の事業もスタートさせた。築100年の蔵を呉服屋にするなど、3年間で27件ほどの空き家が地域に魅力を添える店舗へと転用されたという。

寿地区でも三津浜でも、岡部さんはチャリティとしてのまちづくりでは継続できないと考え、あくまでも利益の

右●空き家だった古い木造アパートを改装したシェアハウス「ブラフテラスヨコハマ」。1階では毎日午後5時まで、日替わりオーナーによるシェアカフェが開業する
上左●岡部さん自身でリフォームを手がけた「ブラフテラスヨコハマ」1階の1室。畳の下は大きな収納になっている
上右●廃材を利用した案内ボード

ある事業として地域に根付くことを目指している。そのための人を招くゲストハウスであり、定期的に家賃収入の見込めるレンタル物件の経営なのだ。

「たとえば空き家の問題も、もう個人の問題ではなく、地域の問題として捉え直した方がいいと思います。しかもそれを負債ではなくアセット（資源）として活用することを考える。まずは地域でお金を集めて、改装して貸し出せば収入になるし、それを地域のために使っていくことができる。そんなふうに自律的でサスティナブルな仕組みをつくりたい」と岡部さん。寿地区や三津浜は、その壮大な実験場でもあるようだ。

町全体が福祉施設で、そのなかに簡易宿泊所があるような寿地区では、たとえばお気に入りのシャワー室へ行くにも、バスローブ姿に入浴用具一式をぶら下げて町を歩いていく人もいる。道端でたむろして話に興じるのも、普通の人がリビングで過ごすのと同じ感覚。つまり、彼らにとって町は一つの大きな「家」なのだ。岡部さんはこの町のそんなユニークな「生きざま」を参考にしながら、町全体を一つの宿に見立ててプランニングを進めてきた。レセプションだけのオフィスから町に散らばる客室に行ってもらうスタイルも、そんなところから生まれた発想だという。

いきなり町の構造を変えるのは難しくても、ネガティブなイメージは変えられる。人が流れるしくみをつくれば、人々の意識もポジティブな方へ変わっていく。そんなふうにソフトウエアを工夫することで、岡部さんのゲストハウスはまちづくりに貢献し続けている。

3 旅の経験を活かし、理想のライフスタイルを発信する場

取材・文:**村田保子** photo:**坂本政十賜**

亀時間 神奈川・鎌倉

日帰りのイメージがある鎌倉で、泊まることの魅力を発信

東京から電車に乗れば1時間ほどで到着する鎌倉は、日帰りで遊びに行く町というイメージがある。社寺を巡ったり海に行ったり、気軽にいろいろな楽しみ方ができるため、繰り返し足を運ぶ人も多いだろう。泊まる場所ではないという認識が広まっているためか、実際に宿も多くはない。データを

●「亀時間」オーナーの櫻井雅之さん

拾ってみても、鎌倉市の年間観光客の延べ人数2196万人のうち、宿泊者数は33.9万人（鎌倉市観光資料2014年度実績概要より）。わずか1.5％しか宿泊していないことになり、延べ人数であることを鑑みても少ない数字である。観光客数自体は増え続けているようで、最新の2015年のデータには、延べ人数で2292万人とある。外国人観光客の増加も一因だろう。

一方で、ここ数年ゲストハウスは増えており、現在は10軒ほどあるという。そのなかでも2011年にいち早く開業したのが「亀時間」だ。オーナーの櫻井雅之さんによれば、開業を計画していた2009年頃にはインターネットで検索しても、鎌倉にゲストハウスは1軒もみつからなかったという。それならば自分がやろうと考えた櫻井さんは、鎌倉に泊まることの魅力をアピールすることを宿のコンセプトの中心に据えた。

「800年以上の歴史がある古都で、海も山も近く自然が豊かな鎌倉には、まだ知られていない魅力がたくさんあります。泊まらないと体験できない価値を伝えていければ、可能性があると考えました。たとえば早朝の海辺の散歩やヨガ、開門したばかりの寺院の散策、鎌倉時代から続く商店街での買い物や食事など。ゆったりとした時間の流れを思い出し、暮らすように旅する楽しみ方を提案していく宿にしたいと思いました」

「亀時間」という名前は、ミヒャエル・エンデの『モモ』に登場する主人公を助ける亀にちなんだもの。時間泥棒に盗まれた時間を取り戻すという小説のストーリーに重ねた、宿での過ごし方への思いが込められている。宿泊客にはリピーターも多く、首都圏からふらりと泊まりに来たり、季節ごとに遊びに来る客もいるとか。日帰りで足早に通りすぎるのではなく、泊まってじっくりと土地の魅力を味わえば、忙しい日々から離れて一息つくことができる。移動時間が短い近場だからこそ、なおさらその効果は高い。

自分らしく仕事をつくっていく ワーク・ライフ・バランス

鎌倉で泊まることの魅力を発信する宿として、櫻井さんは一般的な宿泊施設ではなくゲストハウスをつくることにこだわった。それは鎌倉にゲストハウスがなかったからだけではない。自らの人生や役割、人との縁と向き合って辿り着いた選択だ。

「ゲストハウスに泊まる経験は旅をより楽しいものにしてくれる。出会った人と情報交換したり仲良くなったり、時には人生について語り合う。そんな時間を自分の手でつくり出したいと思いました」

そう話す櫻井さん自身も元バックパッカー。29歳から2年10カ月かけて、アジアやアフリカを中心に24カ国をまわった。旅の経験をもとに将来の仕事を見極める決意で旅立ったという。南アフリカのケープタウンでは、カフェの経営に参加し、好きだった料理の腕を活かして調理を担当。ジンバブエではムビラという楽器と出会い、現地の先生からじっくり技術を習得する機会にも恵まれた。

帰国後、櫻井さんは貿易会社で働きながら、ムビラを日本に広めるため、音楽家として活動することになる。しかし、時間的な拘束が避けられない会社員と、地方でのライブ活動などが欠かせない音楽家の二足のわらじには限界が見えていた。生産／消費のサイクルを中心に動く現代の資本主義システムには飲み込まれたくない。旅の経験を活かし、シンプルな生活のなかに幸せを見出すアジアやアフリカの人々に習うようなライフスタイル。櫻井さんは日本でそのようなライフスタイルを実現するための模索を続け、地元の鎌倉でゲストハウスを開業するという構想に至ったのだ。

「音楽を続けていくためにも、自分で仕事をつくるしかないと思いました。僕自身もまだまだ旅を続けたい気持ちもありましたが、結婚して家族ができたこともあり、そう簡単にはいかない。ゲストハウスをやれば自分が動かなくても、世界中から旅人が来てくれるという逆転の発想もありました。ビジネスレベルで英語が使えること、旅や料理の経験など、自分が得意とすることを活かせる仕事でもあります。現在は宿を経営しながら、ライフワークとして純粋に音楽に取り組めているのかなと。ラウンジスペースで月2回はムビラ教室を開催し、定期的なライブやイベントへの出演も続け、求めるワーク・ライフ・バランスが実現できているのではないかと感じます」

櫻井さん以外のスタッフも旅好きな人たちだが、カメラマンやウェブ制作、アートなど、自分の仕事をもちながら「亀時間」にかかわる働き方を実践している。生活の糧を得ると同時に自分の得意なことを活かし、自分らしく仕事をつくっていく。旅を身近に感じて暮らすという価値観においてゲストハウスで働くことは、既存の枠には収まらないワーク・ライフ・バランスを叶える働き方の一つでもあるのだ。

地域とのつながりに支えられて 古民家を改装

「亀時間」は材木座にある築90年の古民家を改装して営業している。材木座は鎌倉駅から徒歩15分。賑やかな

左●「亀時間」の部屋は、ドミトリーと個室が二つ。写真は定員2名の個室。4.5畳とコンパクトだが庭に面した窓があり、明るく静かで落ち着いた雰囲気
中●味わいのある廊下は住宅として使われていた当時のまま。壁には漆喰をDIYで塗装
右●流木を利用したルームプレート。アートワークが得意なスタッフの手づくり

左●6人まで宿泊可能なドミトリー。2段ベッドや押入れを利用した通称ドラえもんベッドがある
右●定員4名の8畳の個室は、襖で間仕切るスタイル。床の間、欄間、障子など懐かしい日本家屋の風情が楽しめる

●建物は木造平屋建て。櫻井さんが屋根裏に上って構造を見たところ「釘が使われていない昔ながらの日本家屋のつくりだった」という

左●屋根裏から出てきた古い窓は、跳ね上げ式の室内窓としてキッチンの壁にはめ込んだ。あるものを活かし、採光と目線の抜けをつくり出す。窓の上には世界中から集まる亀の置物
中●昔の日本家屋で使われていたようなものを探し、ネットオークションで見つけたタイル製の洗面器。洗面台や鏡はこの洗面器に合わせて大工が造作
右●ステーキ店の厨房はきれいに掃除してそのままオープンキッチンとして活用。カフェやバーの営業、希望者に提供する朝食の準備に役立っている

観光地の喧騒から離れた静かなエリアで、下町の雰囲気を残す商店街を歩けば、広々とした砂浜をたたえる材木座海岸に行き着く。櫻井さんがこのエリアで物件を探したのは、山と海に囲まれた旧鎌倉地域で唯一銭湯が残っていたからだ。ゲストハウスに宿泊するお客さんに、銭湯を使うことを提案したいという思いがあった。エリアが決まってから不動産会社をいくつもまわったが、ゲストハウスという特殊な使い方に対応してくれるところはなく、ほとんど門前払いだったという。そんななか知人の紹介でこの古民家に巡り会った。

「大家さんは古民家への思いが強く、改装せずにそのまま使うことを希望されていました。建物を大切に残していきたいという気持ちは僕も同じ。手を加えるのは最小限にして、現状維持に努めることを根気よく伝え、改装プランを了承してもらいました」と櫻井さん。

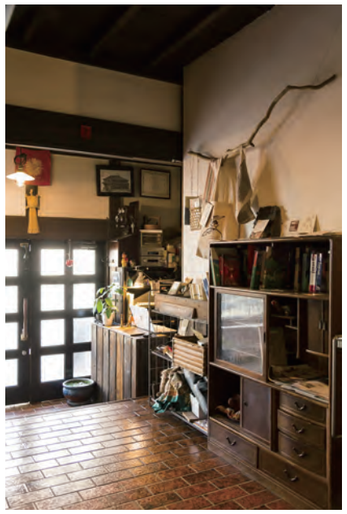
予算を抑えるため、改装はできるだけ自分でやることに決めた。古民家の改装に詳しい知人の大工と相談しながら進めることになったが、以前はステーキ店として使われていた建物は、10年以上空き家として放置され、荒れた状態だった。作業には人手が必要だったため、友人知人に協力を求め、約3カ月間かけて掃除や壁の漆喰を塗った。当初、櫻井さんは、建物が建てられた時の状態に復元するような気持ちで改装に取り組んでいたが、予算の問題もあり、思い描くような着地点が見出せずにいた。知人の大工からの「建物の歴史を活かすことを考えた方がいい」という助言を受け、すべてを残すことよりも、あるものを最大限に活かすという方向に軌道修正。ステーキ店当時のタイルの床をそのまま活用し、余っていた欄間や古い窓なども壁のアクセントに流用するなどして、この建物ならではの和洋折衷な空間ができあがった。

「古民家を活かすことは、環境や町の景観を維持することになり、持続可能な社会をつくることにもつながると思います。改装中に東日本大震災が発生したり、屋根裏に積もっていた砂を掃除するのに2週間かかったりと、大変なこともありましたが、自分で作業をしたことで屋根裏から床下までこの建物のことを把握することでき、より愛着がわきました。僕が借りている間はしっかりメンテナンスし、次世代に引き継げたらと思っています」

そう話す櫻井さんはゲストハウスを始める前から、トランジション・タウンという活動に参加していた。トランジション・タウンとは、地域にある資源を活用しながら市民の創意・工夫により問題を解決し、持続可能な社会をつくることを目指すイギリス発祥の市民活動だ。櫻井さんは、トランジション・タウンの地元グループ「トランジション葉山」の地域通貨のグループに参加し、ムビラ教室のレッスン代などに地域通貨を受け入れていた。この時のつながりが、後の古民家の改装作業を大きくサポートしてくれることになる。

左●使われなくなって放置されていた欄間を、縦にしてトイレの手前の壁のアクセントに
右●テーブルに杉板を張ったダストボックスはスタッフが製作。天板上にはお茶やコーヒーが準備されている。コーヒーは豆を挽いて、ドリップすることも可能

下●ゲストを迎える玄関とフロント。空間内には譲り受けたものやリメイクした古い家具なども並ぶ
右●ゲストが自由に使える共有のラウンジスペース。奥は8畳の個室。イベントの時などは襖を開けて広く使うこともできる。竣工時に設えられた神棚も健在



「共有しているメーリングリストで手伝いを呼びかけたら、たくさんの人が参加してくれて、そこからのつながりも広がりました。また、材木座エリアでのつながりをつくっていきたいとも思っていたので、素人ではできない水道と電気の工事は、材木座商店会の方にお願いしました。それがきっかけで商店会にも入り、お祭りなどの行事にも参加させていただいています」

開業してからは、近所の住民が使っていない布団や簾を提供してくれたり、迷っているゲストを案内してくれたりするようにもなった。「トランジション葉山」のゆるやかなつながりと、材木座での地続きのつながりは、「亀時間」を支える大きな力となっている。

オーナーの人生を映し出す ゲストハウスの面白さ

櫻井さんが考えるゲストハウスの定義は「安価で気軽に泊まれる宿であり、宿泊者同士の会話が自然に始まるような共有スペースがあること」だという。しかし、空間があるだけでは人と人が出会い、そこから何かが始まるような場所にはならない。時には櫻井さんやスタッフが触媒となって、ゲスト同士をつないだり盛り上げたりすることも必要になる。櫻井さんは「自由空間なので会話をする人がいても、静かに本を読む人がいてもいい。目指す空気感はありますが、コントロールするものではなく正解はありません。お客さまによって毎日変わるジャムセッションのようなものだと思います」と、場のつくり方を音楽にたとえる。

「亀時間」をより広い層に知ってもらい、地域の人と宿泊者をつなぐ試みとして、ラウンジスペースで定期的にカフェやバーの営業にも取り組んでいる(現在カフェは休業中)。近くにある寺の本堂で早朝ヨガを企画するなど、イベント開催にも積極的だ。共有スペースや宿の雰囲気のつくり方、イベントやバー営業などの情報発信には、櫻井さんが目指す「鎌倉のライフスタイル」が感じられる。ゲストハウスはオーナーの考え方や人生を映し出す。それがスタッフを含めた運営者にとっての醍醐味であり、宿泊者にとっても面白いところなのだろう。

4 熱海にもう一つの日常をつくる、「二拠点居住」のようなゲストハウス

取材・文:斎藤夕子 photo:坂本政十賜

guest house MARUYA 静岡・熱海

2016年11月の末に改修工事が完了し、商業・飲食などの店舗を併設する駅ビルとして生まれ変わったJR熱海駅。新しくなった駅に一瞬戸惑うも、一歩外に出れば、昔ながらのアーケード商店街だ。ほぼ平行して並ぶ二つの商店街には、名物の金目の干物や温泉まんじゅうを売る店が並び、平日とあっても、そぞろ歩く観光客の姿は多い。

しかも熱海ではちょうど「日本一の早咲き」と称される「アタミザクラ」が咲き始めていた。駅前から海に向かって徒歩15分ほど、熱海銀座商店街の裏手を流れる糸川沿いの遊歩道には、一足早い桜見物を楽しむ人の姿があった。その桜の開花について「例年よりも一週間くらい早いですね」と教えてくれるのは、銀座通商店街で「guest house MARUYA」を運営する株式会社machimori代表取締役の市来(いちき)広一郎さんだ。「100年後も豊かな暮らしができる熱海(まち)をつくる」をキャッチフレーズとするNPO法人atamistaの代表理事も務める。

市来さんは10年ほど前、活気を失っていた熱海を「なんとかしたいと思って」帰郷。以降NPOを設立し熱海銀座商店街を活動拠点に、地域の人々と共に、さまざまなまちづくり活動を展開している。株式会社machimoriは民間のまちづくり会社で、熱海の町なかに点在する空き家や空き店舗のリノベーションを主軸とした事業を行っている。

●株式会社machimori代表取締役の市来広一郎さん

暮らすように、泊まる

江戸時代から続く干物店に、宮造りの店構えに風格を感じる和菓子店、戦後間もなくオープンした飲食店や喫茶店が立ち並び、どこか懐かしい風情の漂う熱海銀座商店街。「guest house MARUYA」は、そのなかほどで、長らくシャッターを下ろしたまま、倉庫として利用されていた空き店舗をリノベーションし、2015年9月にオープンした。

左●糸川沿いに咲く「アタミザクラ」。正名は「カンザクラ」で、1〜2月が見頃（photo:斎藤夕子）
上●歴史ある老舗も多い熱海銀座商店街。1950年の熱海大火以降に再建された商店街には、昭和の面影が色濃く漂う

左●長らく倉庫として使われていた店舗をリノベーションし、2015年9月にオープンした「guest house MARUYA」
上●MARUYAのシェアラウンジ。奥には宿泊客が利用できるキッチンもある

建物は2階建だが、ゲストハウスとして利用されているのは1階のみ。それでも、床面積は約300㎡にも及び天井も高いため、上下2段のカプセル型の個室を中心に最大30名分の宿泊室と、キッチン付きシェアラウンジからなる空間は、とてもゆったりとした印象だ。

主な客層は20〜40代の女性。ただ男性や、かつてユースホステルに泊まり歩いていたような世代も多く、現在のところ最高齢では、80代の女性が娘さんと一緒に泊まったことがあるそうだ。またゲストハウスといえば、外国人のバックパッカーが多く訪れるというイメージがあるが、そもそも熱海を訪れる外国人旅行者は少なく、観光客全体の2％ほどしかない。ただしMARUYAでは約20％が外国人旅行者だそうだ。

「現在の客層は、おおむね想定していた通りです」と市来さん。「MARUYAのキャッチフレーズは〈泊まると熱海が好きになる〉。東京や神奈川など、比較的近隣に暮らしている方が、自宅と熱海での〈二拠点居住〉をしているような感覚で泊まりに来てもらいたい。実際、きちんと数字を出しているわけではありませんが、実感として、リピーターとして何度も利用していただくお客さんの割合は高いですね」

それだけに「あまりゲストハウスに慣れていない、興味はあるけど初めて泊まるといった方が快適に過ごせるような雰囲気づくりを心がけています」とも。確かに「二拠点居住」という宿のコンセプトは、バックパッカーとして世界中あちこちを巡るような旅人にはあまりなじまないだろう。

「どれだけ熱海を好きになってもらえるか。僕らがゲストハウスをやる意味はそこにあります」

市来さんがそう言うように、MARUYAでは毎週土曜日の夕方から、スタッフが熱海の町を案内する「まち歩きツアー」の他、町を楽しむためのイベントを随時開催するなど、お客さん同士、あるいはお客さんと町の人がスムーズに交流できるような仕組みをつくっている。また宿泊客は朝ごはんの時に、向かいの干物店で好きな干物を買

●宿泊スペース。カプセル型の個室が上下2段に配置されている。広さはシングルとツインが基本で、他に3名まで泊まれるロフトルームがある

●カプセル内の内装は、リノベーションに参加したアーティストや地域の人々が手がけた。宿泊客が落書きできる個室や細密画のように町並みが描かれた壁紙の個室もあれば、近くの寺の住職が、お地蔵様をモチーフにした絵を描いた個室も

ってきて、自分で焼いて食べることもできる（予め申し込んでおけば、ごはんとお味噌汁は用意してくれる）。それも、熱海に泊まってこその楽しみ方だろう。

リノベーションまちづくり

今回、MARUYAとしてリノベーションされたのは、戦後すぐに建てられた築60年余りの建物。1970年代頃までは喫茶店として、その後はパチンコ店として、また近年は、倉庫として利用されていたという。建物のオーナーも、以前から熱海のまちづくり活動に熱心に取り組み、市来さんとも活動を共にしていたのだが、シャッターを下ろしたこの建物を再生しようにも、床面積約300㎡という広さゆえに、なかなか活用方法を見出せずにいた。

それが、ゲストハウスとして生まれ変わることになったきっかけは、2013年11月に開催された「リノベーションスクール in 熱海」だ。

「リノベーションスクール」とは、リノベーションを通じ、実践的なまちづくりを学ぶ場として、2泊3日～3泊4日で開催される短期集中型の講座である。2011年8月に北九州市で第1回目が開催されて以降、北九州市では半年ごとに開催されてきた他（2017年3月の講座で最終回となった）、別途、それ以外の町や地域にも展開していったかたちだ。実践ありきのこの講座を、一言で説明するのは難しいのだが、スクールでは「ユニットマスター」と呼ばれる、第一線で活躍する建築家や研究者、ソーシャルビジネスの専門家などからなる講師陣のレクチャーを受けつつ、実際に開催地で空き家・空き店舗になっている物件を対象に、それをいかにリノベーションし、事業を展開するのか、資金調達から人材確保に至るまでのプランをつくり、具体的なプロジェクトを組み立てていく。さらに、ここで考案されたプロジェクトは最終的に対象物件のオーナーにプレゼンテーションされ、提案が受け入れられれば、本当に事業をスタートさせる、というところまでつながっていくのだ。

「僕自身は、北九州市で開催された第2回目からの受講生なんです。その後、熱海でリノベーションスクールを開くことになったのは、2013年の2月に熱海で開催した〈リノベーションシンポジウム〉がきっかけ。この時に、リノベーションまちづくりに携わる方々に熱海に来ていただいて、いろいろと話をしているうちに、その11月に、熱海でリノベーションスクールを開催することになりました」

●宿泊室の突き当たりには、シャワールームや洗面台など、水回りが集められている。驚くのは、その壁が、ゴツゴツとした岩壁になっていること。これは喫茶店だった時代、内装として滝が設えられていた名残りだとか。また、2階に続く階段があるが、そこから先は立ち入り禁止

●引き戸で仕切られた先からは「GUEST ONLY」で、土足禁止。宿泊手続きを行うレセプション（受付）はその手前にあり、内部はシェアラウンジにつながっている。エントランスには鍵付きのロッカーもある

熱海では第1回目のリノベーションスクール以降、今年1月に第4回目が開催され、この間にはMARUYAの他、シェアオフィスやカフェ、アトリエ付きシェアハウスなどのプロジェクトが動き出している。いずれも、建物単体をリノベーションするだけではなく、地域のなかに新たな仕事を生み出し、人を呼び込み、それが町の魅力につながっていくことを目指すプロジェクトだ。

とはいえリノベーションスクールを開催するには、まず、空き家や空き店舗を提供してくれる、オーナーの理解を得なければならない。こうした新しいタイプの活動を、地域の人々がスムーズに受け入れることはできたのだろうか。とくに「ゲストハウス」というと、最近では単に安さだけを売りにした宿も増えている。熱海のような歴史のある温泉街からすれば、何か怪しげな宿と捉えられても不思議はない。

「ゲストハウスができると外国人がたくさん来る、イコール治安が悪化する、というイメージはあったみたいで、地域の方々はその点をとても気にしていました。ですが結果的には、たまに外国人観光客が来て近隣のお店を利用すると、かなりフレンドリーに対応してくれています。僕が直接聞いたわけではありませんが、近くの喫茶店でも〈最近ウチの店によく外国人が来るんだよ〉って、嬉しそうに話していたらしいですよ」

そこは、観光地として長い歴史をもつ熱海の真骨頂なのだろう。もちろん、市来さんらの活動が今に始まったものではなく、すでに町との信頼関係が築かれていたということもある。ちなみに市来さんは、熱海銀座商店街振興組合の理事も務めているそうだ。

「ゲストハウスは旅館やホテルのように、宿のなかだけでなんでも完結できるという施設ではありません。お客さんがどんどん町に繰り出していく、そのための拠点となる施設です。だからこそ地域に開かれて、きちんと根付いていかないと、この業態に未来はない。一番大事なのは、町が良くなっていくこと。そのためにできることを徹底的に突き詰めてやっていくべきだと思っています」

町と人をつなぐ拠点として

さらに市来さんは現在、他にも宿泊施設をつくろうと物件を探している最中だという。

「昔この辺りには、〈湯戸（ゆこ）〉と呼ばれる、27の宿があったんです。それは源泉となる大湯間歇泉からお湯を引くことを許されている、幕府公認の特権的な宿で、それらの存在が熱海の都市空間の起源にもなっています。その歴史を知った時にいいなあ、と思って、ゲス

●シェアラウンジとゲストルームの境界にある壁には、ゲストが来た土地を記すマップがある。外国人旅行者は20％というが、かなり遠方からも訪ねてきているようだ

トハウスをつくる時から、いくつか拠点を設ける構想をもっていました。たとえば、子どもも泊まれるファミリータイプの宿とか、あるいはゲストハウスではなく、実際に暮らすためのシェアハウスや別荘でもいい。MARUYAでも〈二拠点居住〉をうたっていますが、やはり最終的には、町なかに定住人口を増やしたいんです」

熱海市の人口は約3万7000人だが、このうち20～30代の人口減少が深刻な課題になっている。若い世代の進学や就職による転出が多いためだが、逆に、高齢世代の転入が多いことが熱海の特徴で、結果、高齢化率はじつに44.7％にまで達している。温暖な気候で温泉もあり、市街地もコンパクトにまとまっているうえ、設備の整ったリゾートマンションも多い。毎日都心へ通勤するのは難しいけれど、リタイア後なら、これほど暮らしやすいところはない……。熱海に比較的裕福な高齢者が増えていることは、容易に想像がつく。

一方で町なかには空き家がたくさんあり、市街地の空室率は23％に及ぶという。だがそれらの住宅は築年数が古いだけではなく、内風呂がついていないことが多いのだ。もともと、そうした住宅に暮らしていた人たちの多くは旅館やホテルの従業員で、風呂は、勤め先か共同浴場を利用すればよかったからだ。しかし内風呂があって当たり前の現代、そういう住宅には住みづらい。だが市来さんは、それらの住宅をリノベーションすることで、若い世代を町なかに呼び込むことは十分にできると考えている。実際「MARUYAのお客さんには、熱海に物件を探しに来て、その都度利用してくれる人がけっこういる」という。そうして、新しく移住して来た人々と「湯戸」ネットワークを築き、一緒に町を盛り上げていこうというのだ。

そのうえで、まずは独自の温泉施設をもつことが目標だ。「やっぱり熱海に来たら温泉に入りたいじゃないですか」と市来さん。現在MARUYAのお客さんには近くの共同浴場か日帰り入浴に対応してくれる旅館を紹介しているが、いずれも営業時間が短く、なかなか自由に利用できないのだ。また温泉施設をつくれば、ゲストハウスのお客さんだけではなく、町の人や、いずれ増えるであろう「湯戸」仲間も利用することになり、きっとそこには温泉でつながる、いかにも熱海らしい交流空間が誕生するはずだ。

ゲストハウスは、旅行者を泊める「宿」ではあるが、その本質は明らかに、旅館やホテルとは異なる。そして、そこから開かれる可能性の多様さを「guest house MARUYA」は実証しようとしている。熱海の5年後、10年後は、旅行者にも、住む人にとっても、ますます楽しく、魅力的な町になっているに違いない。

上●MARUYAの斜向いにある「釜鶴ひもの店」。ゲストの多くは、ここで好きな干物を買って朝ごはんを食べる。店の人も「外国の方や若い人が買いに来られて、焼き方を教えてあげたりしています。楽しいですよ」とのこと
下●商店街に面したMARUYAのテラス。訪ねた時は休業中だったが、ゲストだけではなく、地域の人々も利用するカフェでもある

ルポ

連携する地域と宿
アルベルゴ・ディッフーゾの可能性

イタリアに「アルベルゴ・ディッフーゾ」と呼ばれる宿泊施設のスタイルがある。地域に点在する民家を、それぞれレセプション、宿泊室、食堂としてネットワークさせ、町のなかを一つの「宿」に見立てるというものだ。これが始まったきっかけには、人口減少で活力を失ってきた地域の価値を掘り起こし、新たな魅力創造を目指そうという、まちづくり的な視点もある。
じつは日本でも、すでに同様の宿泊施設が誕生しつつある。ただ、イタリアと日本では宿に関する法律も旅行のスタイルも異なるため、そこには課題もありそうだ。国内の先行的な事例を訪ねながら、日本版アルベルゴ・ディッフーゾの可能性を考える。

取材・文:**斎藤夕子** Photo:**坂本政十賜**（特記のないもの）

イタリア発、地域に分散する宿

2016年11月、一般社団法人「日本まちやど協会」設立のプレイベントとして、アルベルゴ・ディッフーゾ協会のジャンカルロ・ダッラーラ会長の来日講演が行われた。「アルベルゴ・ディッフーゾ」とは、イタリア語で「分散した（ディッフーゾ）」「ホテル（アルベルゴ）」の意味。これまでは一つの建物の中にあった、レセプション、宿泊室、レストランなどのサービススペースが、地域内に分散された宿泊施設である。日本ではまだあまり知られていないが、イタリアで1980年代に誕生して以降、現在ではヨーロッパにも広がりをみせる新たな宿泊施設のスタイルだ。アルベルゴ・ディッフーゾ協会には、すでに120～130件の登録があるという。

●アルベルゴ・ディッフーゾ協会・ジャンカルロ・ダッラーラ会長。2016年11月21日、一般社団法人日本まちやど協会の設立プレイベントとして開催された講演の様子（photo提供:宮崎晃吉）

その発案者であるダッラーラ会長は、これを宿泊施設としての新しいビジネスモデルとする以上に、人口減少で活力を失った地域を健全化するための「第三の方法」だと捉えている。ダッラーラ会長によれば、従来、イタリアの小さな町や村は、時間が止まった博物館の展示品のように保存されるか、民家にブランドショップや土産店を入居させて商業施設化し、観光客を誘致するテーマパーク型に保存されるという二つのパターンしかなかった。だが、アルベルゴ・ディッフーゾは、既存の町並みとそこに息づく生活文化はそのままに、旅行者は、あたかもその町に暮らすかのように宿泊し、町そのものを楽しむ。それゆえ、もともとその地域にあった仕事や産業はそのまま存続させることが前提で、そこに、宿泊業が誕生したことによって派生する新しい仕事とその雇用が生じ、さらにその仕事への従事者や、地域の魅力を実感した旅行者が移住してくる……といった、地域経済の循環と人口増加までを視野に入れた仕組みだというのだ。なおイタリアには、条例レベルではあるが、アルベルゴ・ディッフーゾ法も整備されているそうだ。

日本版アルベルゴ・ディッフーゾ、谷中「hanare」

じつは日本にも、すでに同様の宿泊施設が実現している。今回、ダッラーラ会長の講演を主催した「日本まちやど協会」発起人の一人、建築家の宮崎晃吉さんが運営する「hanare」はその一つ。東京・谷中に、2015年にオープンしたこの宿は、ヨーロッパ以外では初めて、アルベルゴ・ディッフーゾ協会に登録されてもいる。宮崎さんは他に、谷中で「最小文化複合施設」と

●hanare/HAGISOを運営する、建築家の宮崎晃吉さん（photo:佐藤真）

●谷中にあった築50年の木造アパートをリノベーションし、2015年にオープンした宿泊施設「hanare」。宿泊室は5部屋。宿泊料金は朝食と温泉チケット込みで1室1万6000円から（2名1室）。日本の古い住まいの面影を残す宿は外国人旅行者にも人気がある（photo提供:宮崎晃吉）

銘打つ、築60年の木造アパートを改修した「HAGISO」(2013年オープン)も運営しており、同施設内には、カフェやギャラリーに加え、宮崎さんの設計事務所も入居している。

このhanareとHAGISOは100mほど離れた別々の建物で、宿泊棟であるhanareに対し、レセプションはHAGISOの2階にあり、1階のカフェでは朝食を提供している。また、入浴は基本的に徒歩圏内に5、6軒ある銭湯に行くことが設定されており、宿泊費には銭湯チケットが含まれている。そして、夕食や銭湯帰りの一杯は、hanareスタッフが谷中の飲食店や居酒屋を紹介。他に、近くの自転車店でレンタサイクルを借りることもできる。谷中という町を一つのホテル・旅館に見立てるという意味で、アルベルゴ・ディッフーゾと同様の仕組みをもっている。

ただ宮崎さんは、「hanareをつくった時には、アルベルゴ・ディッフーゾのことは知りませんでした」と語る。協会に登録されたのも、たまたまhanareに宿泊した人がイタリアで、日本にもアルベルゴ・ディッフーゾのような施設があることを紹介したことがきっかけだったそうだ。

「宿を始めたのは、別に観光業を始めたかったからではありません。町のなかで、どういう人たちとその価値や魅力を共有したいかと考えた時に、手段として可能性があると考えたからです。宿って、外からやって来た宿泊者に対して、町をある程度編集したかたちでプレゼンテーションできる。ここに行ってみたらどうですか、こういうところがこの町の魅力ですよという情報を発信し、サゼッションする機能をもっている。また、先につくっていたHAGISOが町のコアになるような存在感をもってきたので、宿という機能も加えると、谷中でしかできない体験を、さらに深く提供できるのではないかと考えました」

hanareとしてリノベーションした建物は、もともとHAGISOと同じような木造のアパートだった。10年ほど空き家として放置されていたが、近隣の住民もオーナーが誰なのかを知らないような状態。このため法務局で登記簿を調べると福井県在住の男性であることがわかった。その男性は、おばあさんから谷中のアパートを相続したが、活用するにも手が回らず、かといって、売ってしまうのもためらわれたため、止むを得ずそのままにしていたそうだ。そこで宮崎さんは意図を説明し、リノベーション活用の承諾を得て、賃貸契約を結んだのだという。

hanareの宿泊室数は5部屋。今号のケーススタディで見てきたようなドミトリー式の部屋はなく、すべて個室である。また、レセプションと食事を提供する空間は別棟だが、じつはhanare自体にも玄関帳場（フロント）と入浴設備が設けられており、夜間も常駐するスタッフがいる。つまり、アルベルゴ・ディッフーゾと共通した仕組みではあるものの、日本の旅館業法上は、ここは小さな旅館なのだ。その意味でも、簡易宿泊所営業を法的根拠にしている多くのゲストハウスとも異なる。

●「HAGISO」。宮崎さんが学生時代に暮らしていたアパート「萩荘」をリノベーションし、カフェ、ギャラリー、アトリエからなる「最小文化複合施設」として生まれ変わった。hanareのレセプションは2階のギャラリーに併設されている（photo提供:宮崎晃吉）

「まちやど」という新たなカテゴリ

しかし、では「ゲストハウス」イコール「簡易宿泊所」かというと、そうとも言い切れず、未だ明確な定義はない。もはや、旅館業法に規定のある「ホテル」「旅館」「簡易宿泊所」「下宿」という区分だけでは、実情に即していないのだ。2016年4月には、旅館業法が一部改正され、主に住宅を活用して宿泊サービスを行う、いわゆる「民泊」への対応として、簡易宿泊所の延べ床面積に関する規制が緩和され、同時に宿泊者10名未満の小規模な施設に限り玄関帳場の設置義務もなくなった。だが自治体によっては条例により玄関帳場の設置を求める場合もあり、法規と現実との間で、ますます混乱が深まっているようにも見える。

宮崎さんらによる「日本まちやど協会」の発足には、こうした背景を受け、アルベルゴ・ディッフーゾの理念を参照しつつ、既存のゲストハウスとも連携しながら、日本の実情にあった宿の形を模索しようという目的もある。

「ゲストハウスが増加したことで、その呼称で一括りにすると、単に安い宿がゲストハウスだという認識が広まる懸念もある。すると、これまで成熟してきたシェア文化のようなものまで陳腐化してしまう。そのなかに一つ〈まちやど〉というカテゴリを設定することで、宿の、ある種のクオリティを保証できるようにしていきたい。それは贅沢なクオリティという意味ではありません。いかにその町に、暮らしているように滞在できるか。その宿に泊まれば、町の住民が感じているような町の魅力を体験し、ひいては実際に〈住む〉という選択肢まで視野に入ってくるといったイメージ。そんな一つの筋というのか、柱がある宿のネットワークを、今後つくっていきたいと考えています」

また現状では、運営そのものを誠実に行ってはいても、旅館業法や建築基準法といった法規の面ではグレーのまま営業している宿もある。「日本まちやど協会」では、そうした現状に対してきちんとロビーイングし、法律の改正や規制緩和などを働きかける役割も果たしていく予定だという。

仏生山まちぐるみ旅館

香川県高松市にある「仏生山まちぐるみ旅館」も、その名称からもわかるように、仕組みとしてはアルベルゴ・ディッフーゾに近い、町全体を「旅館」に見立てた宿泊施設だ。運営する岡昇平さんは建築家で、「日本まちやど協会」の発起人にも名を連ねている。ただ、岡さんも宮崎さんと同じく、アルベルゴ・ディッフーゾについては知らぬまま、同じような仕組みをつくってきたのだそうだ。

きっかけは、東京の設計事務所で働いていた岡さんが、独立して、生まれ育った仏生山で設計事務所を始めようと考えていた2000年頃、岡家代々の家業である飲食及び宴会施設を営むお父さんが、その駐車場内に温泉を掘り当てたことに始まる。それだけでも、かなり興味深いエピソードなのだが、ちょうど帰省を考えていた岡さんは、建築家として、その温泉施設の設計を請け負い、完成後は家業を継ぐ四代目として、新規事業である温泉事業を始めることになった。そうして2005年、日帰り温泉施設として「仏生山温泉」が開業する。ただ、それが「まちぐるみ旅館」という構想につながるまでは、まだ少し時間がかかる。

「温泉の仕事は楽しい。続けていくうちに〈町の温泉を運営する係〉になっ

●香川県高松市の仏生山地区に、2005年にオープンした仏生山温泉。広いロビースペースは地域の人々の憩いの場にもなり、町の拠点機能を担っている。入浴料は大人600円（中学生以上）、小人300円（3歳以上）

●仏生山温泉のすぐ裏、20mほど離れた場所に建つ「温泉裏の客室」。もともとここにあった、ハウスメーカーによる住宅をリノベーションし、4室の客室をつくった。1人1室で6800円（連泊の場合は2日目から5800円）。温泉には営業時間中ならチェックアウト後でも、何度でも入ることができる

●「仏生山温泉番台」とも名乗る、建築家の岡昇平さん

たと感じるようになりました。そして、今後もずっとここで暮らしていこうと思いました。それからは、いかに自分の住む町を今よりも楽しい場所にして、どうやったら、にやにやしながら暮らしていけるかを考え始めるようになりました。といっても、そんなに大それたことを望んでいるわけではなくて、毎日でも通いたいおいしい定食屋さんとか、ゆっくり読書のできる居心地のいいコーヒー屋さんとか、自分が行きたいと思えるお店がその場にあって毎日楽しく過ごすだけで、十分にやにやできると思いました。まちぐるみ旅館の目的の一つは、そういうお店を増やすことです。町を旅館に見立てる、というと奇をてらったように思われるかもしれないけど、じつはそうでもありません。なぜなら、町も旅館も本当は一緒だからです。衣食住の機能が一つの建物に入っているのが〈旅館〉で、地域に分散しているのが〈町〉と呼ばれているだけです。改めて考えてみるとどちらも〈暮らし〉のことなんです。まちぐるみ旅館は町を健康にしていくための、方便のようなものです」

岡さんは「まちぐるみ旅館」を考えた経緯をそう教えてくれる。これが具体的に動き出したのは2012年。岡さんが2007年に設計した住宅のオーナーが引っ越すため、その家が空き家になってしまうことになった。そこで岡さんは自らその物件を借り、一部リノベーションを施して宿泊施設へ転用。「縁側の客室」をオープンした。ただし、リノベーションしたとはいえ、ほぼ住宅そのままで、一棟貸しで1組しか宿泊できない宿であり、仏生山温泉からは約900mも離れた場所に建つ。だが、宿泊施設ができたことで「まちぐるみ旅館」という構想は現実味を帯びてきた。

「見立て」で変わる町の姿

以来、町のなかにも自然と新しい動きが出てきた。2014年に、手づくりサンドイッチを売りにしたカフェがオープンしたのを皮切りに、年間2～3軒のペースで、カフェやレストラン、雑貨店、ギャラリーなど、今まで仏生山にはなかったタイプの新しい店が誕生した。岡さん自身も、友人らと共同経営というかたちで、建具工場の物置だった場所をリノベーションした古書店「へちま文庫」を2014年にオープン。2015年には仏生山温泉のすぐ裏にあった空き家をリノベーションし、宿泊室数4部屋の「温泉裏の客室」を開業した。なお最初につくった「縁側の客室」は2017年からはクローズし、現在、ワークショップなどを行うための施設に改装中だという。

「〈まちぐるみ旅館〉といっても、そう言っているだけで組織も何もありません。町を旅館に〈見立てた〉だけ。でもそれだけで、町に変化が出てきました」と岡さん。いずれも、空き家や空き店舗、倉庫などのリノベーションによって誕生した店だが、岡さん自身が建築家として携わったものもあれば、そうではないものもある。また経営はそれぞれが独立採算で行っているだけであって「まちぐるみ旅館」として運営しているわけはない。ただ岡さんは「町に新しいお店ができれば、〈自分の部屋が一つできた〉という感覚で、楽しくなります」とも語る。

それにしても、「旅館」という以上は旅行者の受け入れも想定していると思うのだが、だとすれば、宿泊機能はあまりに少ない。岡さん自身も「トータルで10室くらいにしようとは考えている」とはいうが、それほど積極的には見えない。なぜならここでは、旅行者が観光で訪れることは「結果的に」起きるかもしれないが、目標に掲げてはいないからだ。宿泊施設の利用者も、実家に帰省した子どもたちや訪ねて来た親族が利用するなど、地域の人が使える施設であることが理想だとさえ語る。

仏生山は、高松市の市街地からクルマで20分ほど。古くは、松平家の菩提寺として開かれた仏生山法然寺を中心に、独自の歴史・文化を育んできた地域だが、近代ではベッドタウン化した住宅地になっていた。そうしたなかで岡さんは、いつしか地域から失われていた「健康な町がもつべき機能」を、改めて再構築するために、町を一つの旅館に見立てた「まちぐるみ旅館」というプラットフォームをつくったのだ。すると、仏生山は高松市の一部というよりも、仏生山という、一つの輪郭をもったエリアとして際立つようになった。岡さんは「意識のスイッチを切り替えるだけです」と言うが、そのエリアに、ある種の共通する雰囲気をもつ新しい店が次々と誕生するようになったのは、町の人の意識が変化してきたからだろう。

hanareの宮崎さんは、アルベルゴ・ディッフーゾ的な宿のあり方に関して「町のなかの既存の施設をネットワークさせて、一つの宿泊体験を実現できるようにする、そのプロセスによって、町の人や町とのコミュニケーションを健全化させる機能もある」とも語っていたが、仏生山で起きている変化の理由も、この辺りにあるのかもしれない。

まちづくりや地域活性化という視点から見た時、旅行者が、一時をその町や地域で過ごすだけの観光が、どれほど町に貢献できるかは常に議論されてきたところだ。ただ、町そのものを「宿」と見立てるアルベルゴ・ディッフーゾ的な試みは、旅と町の関係に、新たな視点をもたらすことは間違いない。そこに可能性を見出した「日本まちやど協会」の今後の活動からも、目が離せない。

左上●2015年に東京から移住してきた家族の住居兼雑貨店「TOYTOYTOY」。3軒の賃貸住宅をまとめてリノベーションし、駐車スペースだった場所には芝生を貼って広場のようにした
左下●古書店「へちま文庫」
右上●仏生山に代々続く呉服店の若夫婦が、もともと経営していた洋品店から業態転換。2014年に手づくりサンドイッチが評判のカフェ「仏生山天満屋サンド」をオープンした
右下●古民家カフェ「アジール」の待合だった場所をリノベーションした「サーカス図書館」

●松平家の菩提寺として開かれた法然寺へと続く町並み。沿道には歴史を感じさせる商家も数多く残る。創業200年以上の歴史をもつお酢の醸造所「神崎屋」（右）の家屋は、仏生山でもっとも古い建物といわれている

上●高松築港から金刀比羅宮（こんぴらさん）までを結ぶ、高松琴平電気鉄道（ことでん）の仏生山駅に設置された「電車図書室」。待っている間に書棚の本を読んでもいいし、気に入れば、一律200円で購入してもいい
右●2016年のオープンしたカフェレストラン「Nöra（ノラ）」。ランチタイムには行列になることも珍しくないという

連　載

スキマファイル no.10

高層ビルが背丈を競い合っている今日この頃、ふと、足元を見れば、隙間がじわじわと増殖中だ。
都市の空洞化を嘆く御仁には、隙間は負の象徴に見えるのだろうが、断じてそんなことはない。
隙間にこそ、都市の未来が隠れているからだ。「都市には隙間が良く似合う」とは誰の言葉だったか。
この言葉の意味を探るべく、都市にスキマを探しに行く。スキマ探検隊、いざ出陣!!

蒲田・鶴見、昭和の秘境駅。

[今回探検した場所]大田区蒲田、南六郷、横浜市鶴見区　[ゲスト]森田弘志さん第一生命財団補佐役

構成・写真:スキマ探検隊 イラストマップ:小夜小町

スキマ探検隊とは、サッチン、ユーコ、オマチマン、サヨちゃんを中心に編成されたスキマ愛好家グループ

もの づくりの町

今回のスキマ歩きの舞台は大田区と横浜市鶴見周辺。なぜ大田区? それは、大田区が日本を代表する町工場の集積地であり、スキマがたくさんあるように思えたから。まあなんとなくですが……。では、横浜市鶴見は? というと、大田区の隣で、こっちには大きな工場がいくつもあります。近くには京浜運河もあり、やはりなんとなくスキマがありそうな気がしたので。でもそれだけではありません。JR鶴見線には国道駅という名前のものすごい駅があって、ぜひそれをこの眼で見ておきたかったからです。ここは高架駅で、なんと高架下がトンネルのようになっていて、駅舎それ自体がスキマというとんでもない駅なのです。これは見ずにはいられません。いざ出発進行!

●JR蒲田駅東口と京急蒲田駅の間にあるアーケード商店街「京急蒲田あすと」。そばには、松竹キネマ蒲田撮影所跡地に建てられた大田区民ホール「アプリコ」がある

探検隊(以後探検隊と表記)—待ち合わせ場所の蒲田駅に約束の時間より早く着いてしまったので、東口そばの大田区民ホール「アプリコ」を大急ぎで見学しました。「アプリコ」と他の複合ビルが並ぶこの場所は、旧松竹キネマ蒲田撮影所の跡地。それもあって、「アプリコ」の地下1階には、松竹撮影所のジオラマが展示されていて、ロビーにはかつて撮影所正面前の逆川(さかさがわ)に掛かっていた「松竹橋」の親柱が移築されていました。

森田—松竹キネマ撮影所では、大船に移転する昭和11(1936)年までの17年間、約1200本の映画がつくられたそうです。

探検隊—物の本によると、それまでのスター中心の映画づくりから監督第一主義を掲げ、「蒲田調」と呼ばれる松竹の映画スタイルを築いたとあります。山田洋次監督の「キネマの天地」(1986年)は、そんな撮影所が大船に移転される頃の話。映画のメッカとして「流行は蒲田から」という言葉まで生まれたそうですよ。そういえば、蒲田駅の発車メロディは「蒲田行進曲」でしたね。

●雑色駅から第一京浜国道までてくてく歩いていくと、こんな歴史を感じる鮮魚店に出くわした

森田—蒲田といえば羽根つき餃子が有名ですが、その三大名店の一つ「歓迎(ホアンヨン)」でランチをしました。羽根のパリパリ感と肉汁たっぷりの餃子に一同大満足!

探検隊—蒲田には、アーケード付きの商店街がいくつもありますが、最初に通った商店街「京急蒲田あすと」もその一つ。雨が降り出したにもかかわらず傘をささずに買い物ができると大喜び(笑)。

●なんと新しく建てられた工場の真裏には廃屋寸前の建物が!

森田—八百屋さんも魚屋さんも衣料品店もみんな元気に営業中。昨今シャッター街が問題になっていますが、ここはまったくどこ吹く風でしたね。

京急蒲田駅から隣の雑色駅で下車。正月の箱根駅伝で学生ランナーが走る第一京浜国道を渡る。

森田—ここにも商店街が続いていますが、蒲田同様シャッターの閉まったお店はありません。さすがに商店街にはないようですが、路地を一歩入ると、ぽちぽちと町工場が見えました。わりと新しめの工場を発見。ところが、その奥には廃墟のような、今にも崩れそうな建物がありました。もとは工場だったのかもしれません。

探検隊—その隣りの化粧品店の裏にも古い民家に囲まれたおかしな空間がありました。

森田—ここも工場の跡地でしょうか。町の新陳代謝で人為的にできたスキマ。ドンツキもいくつかありましたが、否応なしにできた「スキマ」がけっこうありましたね。

左●「大きな穴から小さな穴まで」穴のことならなんでもおまかせの藤原製作所です
中●大田区は工業の町。なかでも六郷周辺は、機械金属加工の工場が多く集まっている
右●ドラム缶一杯の金属の削りかす

探検隊—さらに歩くと、遠くに多摩川が見えてきました。

森田—多摩川に突き当たる手前にあったのが「六郷水門」。

探検隊—水門の手前は船溜まりになっていて、釣り船が係留されていました。

森田—「六郷水門」は、昭和6(1931)年竣工。下水道が普及するまで、六郷用水の末流を始め、六郷や池上、矢口、羽田の一部の地域の生活排水を処理していたようです。土手に上がって見てみると近代土木遺産(国交省)に推奨されただけあって、重厚なつくりでした。隣のレンガづくりの建物は、おそらく水門の開け閉め作業などを行うところでしょう。こっちもなかなか趣のある建物でした。

探検隊—「六郷水門」から京急六郷土手駅まで、お目当ての町工場がたくさんありました。

森田—大田区の町工場の特徴は、住宅街の真っただなかに工場が林立していることです。もともと町工場が建ち並んでいたところに、一戸建ての住宅やマンションが進出してきたというのが実態でしょうが、騒音や匂いなどは大丈夫なのか、ちょっと心配になりました。工場のほとんどは戸口を閉め切っています。寒さばかりではなく、近隣への配慮なのでしょうか。建物と建物の間に適度なスキマがあるのも同じ理由かもしれません。

左●船溜まりに係留された釣り船。奥に見えるのが「六郷水門」
右●六郷用水と多摩川との合流点に設けられた六郷水門。国交省の近代土木遺産リストにも登録されている

●すでに役目を終えた六郷橋の橋脚が設置されている宮本台緑地。なんとみごとなスキマ利用!

●本当に天然温泉なのか確かめたかったのに、残念ながら本日休業

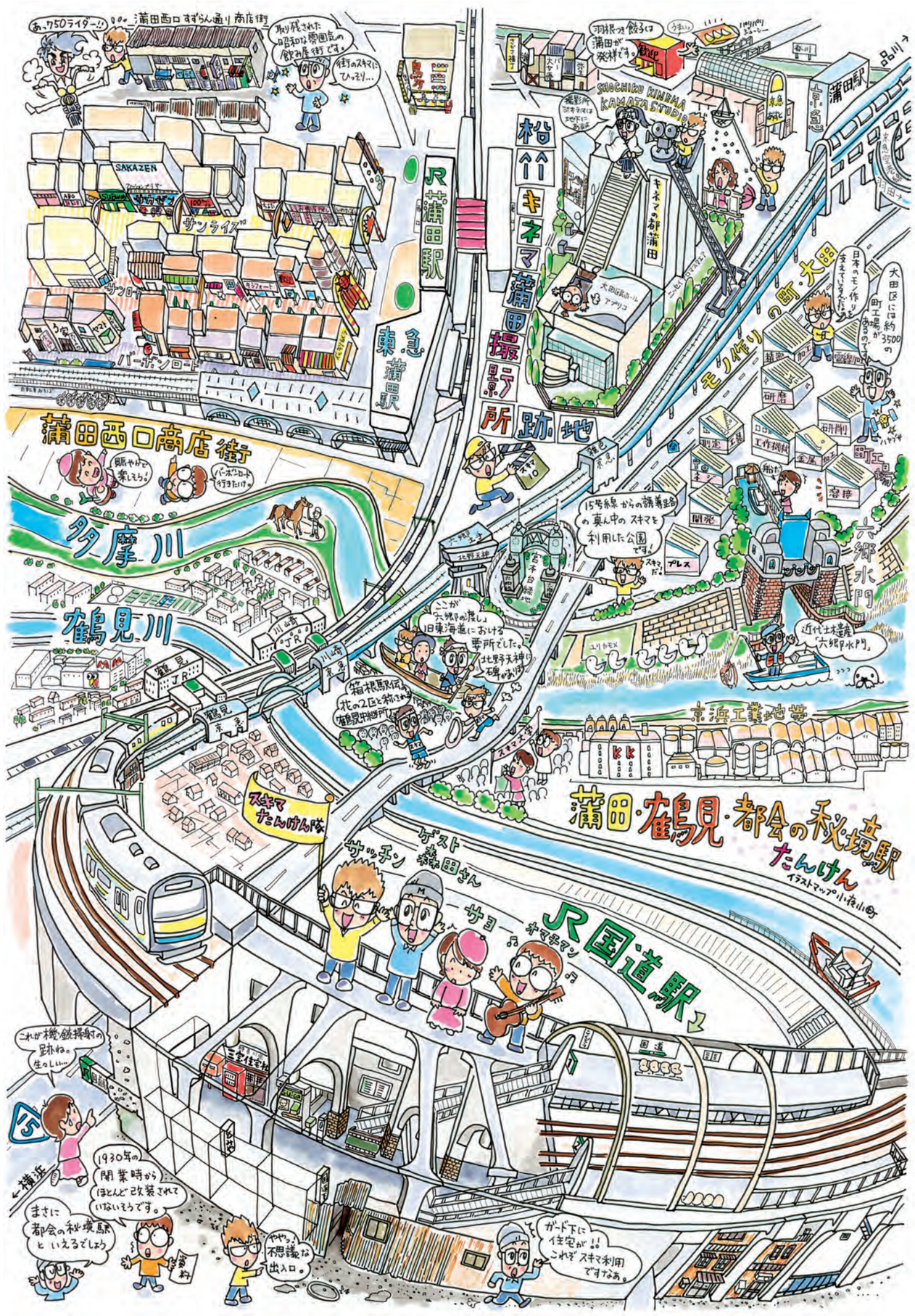
森田—工場の多くは切削・プレス・成型・研磨といった金属加工が中心で、その数なんと3500といわれています。

小夜ちゃん—金属の削りかすが置かれた工場もあって、作業の様子が想像できて面白かった。

探検隊—第一京浜国道の高架脇の宮本台緑地(公園)には、古い橋脚のようなものがありました。インターチェンジのような円形の道路の降り口ですが、すごく目立ちます。

上●国道駅の正面右上には、アメリカ軍機による機銃掃射の銃弾の痕が確認できる

右●国道駅構内に残された古い看板。もちろん看板の主はもういない



左上●国道駅構内でただ一軒営業している居酒屋。ホームの下にあるから「国道下」とはこれいかに
左下●国道駅脇の資材置き場のようなつくりかけの庭のような……、たぶんただの空き地
上●無人駅だからこそ効果を発揮するはずのSuicaの自動改札機だが、なんか居心地が悪そうに見えるのは僕だけか

森田―あれは旧六郷橋の橋脚。橋を架け替えた時にできた公園で、いわば「できてしまったスキマ」に、産業遺構を移築したわけです。みごとなスキマ利用だと感心しました。

昭和の香りのするスキマ

探検隊―いよいよ向かうはJR鶴見線・国道駅。六郷土手駅から京急で花月園前駅下車、ここから徒歩数分で国道駅に着きます。

森田―花月園前駅（高架上にある）の見所といえば、なんといっても高架上からの線路の眺め。どうです、すごいでしょう。東海道線・横須賀線・京浜東北線・京急線が複線で走っていて、なかなか圧巻です。

小夜ちゃん―しかも、踏切もあるわ。まさに開かずの踏切。

森田―第一京浜を渡れば国道駅です。

探検隊―うわっ！ これはすごいぞ。まるでトンネルじゃないですか。それにとっても古い!

森田―鶴見から京浜工業地帯に向かうJR鶴見線の駅として昭和5（1930）年開業です。駅の入り口の壁には、第二次世界大戦末期にアメリカ軍機の機銃掃射をうけた銃弾痕が残っています。

探検隊―構内に入ってさらにびっくり。アーチ状の高い天井の下に駅は50mぐらい続いていて、少し進むと改札があり、自動券売機とSuicaのタッチパネルがありました。この新旧の落差がはんぱないです。

森田―じつは、国道駅は大都市圏内ではほとんど見かけることのない無人駅です。今でこそ穴倉のようですが、開業当時はたくさんの店が軒を連ねるデパートのような駅だったらしい。現在は、たった一軒「国道下」という居酒屋があるだけです。

探検隊―高架下に飲食店や商店がある所は都内にもいくつかありますが、国道駅のユニークなところは、住宅として利用されている建物が何軒かあることです。高架下を目一杯使っているので、1階部分の天井が高く、1階を事務所として利用している家もあるみたい。

●国道駅そばの鶴見川には釣り船が多数停泊する

森田―トンネルのなかには穴倉型のスキマがあり、そのトンネルの外に出れば、生活の匂いがプンプンする居住空間としてのスキマが広がる。国道駅の高架下には、そんな二つの顔をもつスキマが存在しているのです。

探検隊―「残されたスキマ」、「できてしまったスキマ」、そして「歴史がつくったスキマ」。今回のスキマ巡りは、いろいろなタイプのスキマと出会えて、とても満足です。

小夜ちゃん―さあ、最後は再び蒲田へ戻り、アーケードのある西口の商店街でいっぱいやって解散しましょう。

左●JR蒲田駅西口には、「サンライズ」と「サンロード」という二つのアーケード商店街が並行する
下●JRの高架下とその向かい側には、飲み屋がずらっと軒を連ねる

左●国道駅への最短ルート?!
中●国道駅は構内をデパートにする計画があったという
右●国道駅高架下の住宅。ほとんどが駅開業当時から住んでいる人たちだという

連載 第⑩回

子どもたちの「笑顔」に会いに行く

2016年度で第4回目となった、一般財団法人第一生命財団による「待機児童対策・保育所等助成事業」。今回の助成には243件の応募があり、厳正なる審査の結果、44件に対し総額2998万円(申請額)の助成が決定、それぞれの保育所及び認定こども園へ贈呈された。そのなかから今号では、とくに子どもたちの心身の成長を目的とした大型遊具や施設を整備した、栃木県宇都宮市の認定こども園と神奈川県藤沢市の保育園を訪ねた。

取材・文・photo:**斎藤夕子**

栃木県宇都宮市 認定みどりこども園

全身を使ってダイナミックに遊ぼう!

宇都宮駅から2.5kmほど。創業以来六十余年「宇都宮の迎賓館」として皇室を始め多くの貴賓客を迎え入れてきた宇都宮グランドホテルのすぐ近くに、2015年4月に開園した「認定みどりこども園」。運営するのは学校法人岩本学園。もともとは1953年より、近くで「みどり幼稚園」を運営していたが、道路拡幅に伴い移転が求められたことをきっかけに、新たに、認定こども園としてスタートを切った。

「幼稚園に比べて、敷地は3倍ほど広くなりました。敷地の2面は、東北本線の線路と田川に接していますが、その分周囲に建物が少ないので日当たりはいいですし、保育環境としては満足しています」

そう教えてくれるのは岩本眞砂枝園長だ。法人の理事長でもある。

●岩本眞砂枝園長

●広々とした園庭と、平屋建ての園舎。黄色の外壁が暖かな雰囲気をつくっている

暖かな雰囲気の黄色い園舎

幼稚園時代よりも広くなったという敷地に建つ園舎は基本的に平屋建てで、子育て支援室だけが2階として設置されている。園庭にも十分な広さがあり、とても伸びやかな印象だ。さらに園舎を特徴付けているのは外壁の色で、ヨーロッパの古典的な建築によく用いられている「テレジアンイエロー」をベースに、日本の町並みにもなじむ黄色にしたという。またその外壁のところどころに、抽象的に動植物や建物などを描いた鉄製のオブジェが飾られている。佐賀を拠点に活動する画家・塚本猪一郎氏の作品だ。岩本園長は「完成されたキャラクターのような絵や人形よりも、こうした抽象的な作品の方が〈これはなんだろう?〉という興味や好奇心を刺激します。それが、子どもたちの感性や想像力を育むと考えています」と語る。

それだけに、広々とした園庭にも既存のキャラクターを用いた遊具は見当たらない。子どもたちは元気に走り回り、自由に遊びをつくり出しているようだ。ただ「近年の園児の体力測定の結果を見ると、全体的に筋力が弱く、バランス感覚も年齢値としては低い」ことが、岩本園長の懸案事項だった。そこで、子どもたちがダイナミックにからだを動かして遊ぶための遊具が必要だと考えていたが、開園時の資金計画のなかでは実現できずにいた。「そんな時に助成の話をうかがって、ぜひ、子どもたちが全身を使って遊べる遊具を実現するための資金にしたいと考えました」と岩本園長。じつは園の一角には、園庭とは別に、プールテラスと称する、ウッドデッキが広がる小さなスペースが設けられている。そこに樹齢を重ねたイチョウの木があり、この木にツリーハウスをつくりたいというのが、この場所に開園することを決めた時からの、岩本園長の希望だったのだ。

左上●黄色の外壁に飛び出すように張り込まれた園の名前と、動植物を模った鉄のオブジェ
左下●エントランスの床には、栃木県内の益子焼などの焼き物の破片でできた「陶砂利」をモザイクのように張り込んだ。東日本大震災で壊れてしまった焼き物を使っているという
右●認定みどりこども園の外観。ゲートファサードには、栃木県に産する大谷石を用いている

●多目的ホールからプールまでつながるウッドデッキと芝生広場のある一角は、園庭とは趣の異なる小さな遊び場になっている

左●イチョウの木の周りに、設置されたばかりの木製遊具。子どもたちの「やってみよう!」というチャレンジ精神を刺激するようだ
中●てっぺんまで登って、得意げな笑顔を見せる女の子
右●「中に何人入れるかな?」とチャレンジ。「ごっこ遊び」の場にもなる

子どものチャレンジ精神を刺激する

岩本園長に案内され、園の北西、多目的ホールの裏側へ進むと、子どもたちのはしゃぐような声が響いてきた。

「これ、いつからあるの!?」「こんなに高くまで登ったよ!」「いつまでだって遊べちゃうよ〜!」

見れば、ウッドデッキに面した芝生広場の真ん中に立つイチョウの木の足もとを、2mほどの高さをもつ四角錐の木製遊具が囲んでいた。一つの面にクライミングのホールドが、二つの面は丸太を積んだハシゴのように、もう一つの面には、穴の空いたパネルが内部への入り口のように設置されている。何人もの子どもたちがそれぞれの面に張り付き、てっぺんに登り、中に潜り込んで、思い思いに遊んでいた。子どもたちが「いつからあるの!?」と驚いているように、設置からまだ数日しか経っておらず、いま遊んでいる子どもたちは、今日初めて目にしたようだ。

「ツリーハウスまでは実現できませんでしたが、まずはこの遊具をきっかけに、順次発展させながら広げていきたいと考えています」と岩本園長。ただ子どもたちの声を聞けばわかるように、これだけでも、十分に好奇心を刺激する遊具であることは間違いない。しばらく見ていると、どれだけ早く登れるか、どの面が一番難しいか、中に何人入れるかなど、次々と新しい遊び方を開発している。てっぺんに登った男の子は、額に手をかざして遠くを見渡すようにして、「なかなかいい眺めだよ!」と得意げに教えてくれた。

●この日は、多目的ホールで1月生まれの子どもたちのお誕生日会がひらかれていた

地域に見守られてのびのび育つ

2016年の夏、宇都宮一帯では豪雨のための浸水被害があった。みどりこども園の園庭も、排水が間に合わずに少し水が溜まったという。この時、結果的に大事には至らなかったが、園には送迎バスがあったため、園児はこれで避難することができた。ただ、近くの保育園には送迎バスはなく、2階にみんなを集めて時をやり過ごしたそうだ。岩本園長はこの話を聞き、改めて、園児を長時間預かる責任の重さと、環境整備の重要性を実感したという。

「地域の方々が出水に対する防災活動をしていたので、この時にも事後対応で何かとご協力いただきました。今後はより皆さんと連携して、防災と、そして地域との交流をしっかり考えていきたいと思っています」と岩本園長。

子どもたちがのびのびと安全に、安心して成長していくためには、当然、

防災は重要な視点だ。園として備えることはもちろんだが、いざという時には、地域社会との連携こそ大きな力になるだろう。そのためにも、日頃からの交流を岩本園長は大切に考えている。

子どもたちの健やかな成長のため、多彩な視点からの取り組みを展開するみどりこども園。イチョウの木の周りで、少しでも高いところに登ろうと果敢に挑戦する子どもたちの伸びやかな姿は、園長や先生方はもちろん、地域社会からも、暖かく包み込まれているという安心感があってこそのものに違いない。

神奈川県藤沢市 湘南まるめろ保育園

里山のなかの小さなおうち「まるめろっぢ」

2009年に完成した駅前の交通広場を皮切りに、湘南地区最大のショッピングモール、病院、居住区などが次々と整備され、都市拠点の形成が進められている辻堂駅周辺。すっかり洗練された駅前からバスで5分ほど行けば、湘南バイパスの向こうに、鬱蒼と茂る山野が現れる。裾野の住民が古くから生活のなかで活用してきた里山だが、今ではほとんど利用されず、その管理が難しくなっている。ただ、住宅地と隣接しているため「地域の環境保全という意味でも必要だと考え、うちの裏山は7年ほど前から、整備を進めていました」というのは、今回訪ねた「湘南まるめろ保育園」を運営する社会福祉法人永寿会の川島進理事長だ。

同法人では藤沢市内や東京・町田市などでいくつかの高齢者福祉施設を運営しているが、待機児童の増加といった社会的な要請と、「老保交流」により、高齢者と子どもたち双方の心身の健康を育むといった視点から、2015年4月「湘南まるめろ保育園」を新設した。

●川島進理事長

里山の秘密基地

「うちの裏山」とは、まさしく、川島理事長の自宅と、それに隣接する同法人運営の「特別養護老人ホームかりん」の裏に広がる山で、保育園からも歩いて5分ほどの場所。整備された山は、程よく人手が入ったことで木々の根元にも日差しが差し込み、小さな草花を始めとする多彩な植生が復活、昆虫や鳥などもたくさん訪れるようになった。もともとは、保育園のために整備したわけではなかったが、最近はこうした自然環境を体験できる場は少ない。そこで子どもたちの遊び場として開放してみると、「それはもう、楽しくって。子どもたちは、いったん里山に遊びに行くと、なかなか園に帰ろうとしません」と教えてくれるのは、同園の近藤正代園長だ。

それだけに、子どもたちの里山での自然体験をより充実させたいと「キッズハウス」の設置を検討していた。そんな時に助成の話を知り、その費用の足しになればと応募したという。

●近藤正代園長

「おかげさまで、先日やっと完成しました。まだ少し周辺の整備をしようと思っていますが、子どもたちは今日初めて、小屋の中に入ってみることにしているんです」と川島理事長。すでに、4、5歳の園児が里山に行っているという。追いかけて行くことにした。

その里山は、住宅地に隣接しているとはいえ、なかなか本格的な自然の様相で、モウソウチクを中心に、スギ、ヒノキ、コナラやクヌギなどが茂っていて「山歩き」という気分になる。蛇行する山道に沿ってしばらく登っていくと、完成したばかりの小屋の前に子どもたちが集まっていた。建設中から、中に入ってみたくてうずうずしていた子どもたちは、今日がお披露目とあって、理事長の到着を待ち構えていたのだ。小屋の名前は「まるめろっぢ」。理事長がふと思いついた名前だが、すでに子どもたちにも定着していて、「みんなのおうちの名前は?」と訪ねると「まるめろっぢー!」と元気な声が返ってきた。

●理事長宅の裏手に広がる里山。子どもたちの格好の冒険の場になっている

●初めて入る「まるめろっぢ」に興奮気味の子どもたち。ぴょんぴょん飛び跳ねたり、外をのぞいたり。これからは、この小さなおうちを拠点にした、たくさんの楽しいことが待っているはずだ

子どもたちは靴を脱いで、どんどん中に入っていく。飛び跳ねたり、少し高い窓から外をのぞこうとしたり。広さは6畳ほどだが、20名ほどの子どもたちが入ってもそれなりに余裕がある。天井も高く、なかなか快適そうだ。

「こういった秘密基地のようなおうちは、子どもたちにとって、それだけで特別な場所。今後はここでお弁当を食べたり、お昼寝をしたり、デイキャンプのようなこともしたいですね。本当にいろんな可能性が考えられます」と、近藤園長。電気を引いていないため少し薄暗いが、それも自然のなかでの体験の一つ。必要であればランタンを使うことも考えているそうだが、少なくとも子どもたちは、そんなことはまったく気にしていないようだ。

自然のなかで、からだも心もたくましく

初めて入る小屋の中を楽しんでいた子どもたちだったが、少しすると、次々と外に出てきた。見ていると、山の斜面に取り付き、ササなどの下草を手がかりにしてよじ登ったり、辺りを走り回ったり、ツバキの赤い花びらを集めたりと、思い思いに遊び始めている。小屋は小屋で楽しいけれど、里山にはそれ以外の遊びがいっぱいあるのだ。

「里山では、登ったり、滑ったり、落ち葉を拾ったり、ミミズを探したりと、子どもたちは自分でいろんな遊びを考えて、発見して、自由に遊んでいます」と近藤園長。ただ、それも最初からできたわけではないという。

「最初は、クモの巣があっただけで〈キャー!〉と言って逃げたり、泣き出したりする子もいたんです。坂道を登るだけでも〈怖いからもう帰ろう〉と言うことも。それでも、周りのお友だちが楽しそうに山に登っているのを見たり、クモをよく観察したりしていくなかで、いつの間にか大丈夫になり、楽しくなっていくようです。先日も、1月に転入して来た子が山道を歩くのを怖がったのですが、ほかの子どもたちが〈山側を歩けば大丈夫だよ〉と教えてあげていました。自然のなかで、子どもたちがどんどん成長していることを日々実感しています」

お昼ごはんの時間になって、里山から帰ってきた子どもたちは皆一様に泥んこだ。だが、保護者もそのことは理解していて、着替えを持って来ているという。子どもたちが日々、たくましく成長していることは、お父さん、お母さんこそ、実感しているのだ。

春になり、草木が芽吹き、花が咲けば、まるめろっぢの周りはますます賑やかになるだろう。季節ごとに移り変わる自然のなかで子どもたちが得る体験は、大人になっても忘れない、かけがえのないものになるに違いない。

●木の温もりが感じられる、湘南まるめろ保育園の外観

左●まるめろっぢから出てくると、斜面に取り付いて登り始めた一団。その数はこの後、どんどん増えていく
右●お天気がいい日は、園舎のベランダでお昼ごはん

●園舎の前面にも、広々とした楽しげな園庭が広がっている。同園には他にも、専用の野菜畑がある。また子どもたちは近くの高齢者施設にもよく遊びに行き、おじいさん、おばあさんとの交流も楽しんでいるそうだ

back number

今号と関連する特集号をPick Up
（その他は特集タイトルのみ）

No.1 特集「都市の幹線道路」（1984.2）**在庫切れ**
No.2 特集「都市公園」（1984.5）**在庫切れ**
No.3 特集「都市と河川」（1984.12）
No.4 特集「子どものための都市計画」（1985.6）**在庫切れ**
No.5 特集「都市と盛り場」（1985.12）
No.6 特集「都市生活と神社仏閣」（1986.5）
No.7 特集「住宅地の道路と家並み」（1986.9）
No.8 特集「都市とヒューマンスケール」（1987.3）
No.9 特集「都市と水辺」（1987.7）**在庫切れ**
No.10 特集「都市の景観」（1987.12）**在庫切れ**
No.11 特集「都市と防火」（1988.7）**在庫切れ**
No.12 特集「都市とアメニティ」（1988.12）**在庫切れ**
No.13 特集「都市と運河」（1989.8）
No.14 特集「都市再開発とアーバンデザイン」（1989.12）
No.15 特集「アミューズメントと都市」（1990.3）
No.16 特集「高齢化社会と都市」（1990.6）**在庫切れ**
No.17 特集「私鉄と歩んだ都市」（1990.9）
No.18 特集「都市とホール」（1990.12）
No.19 特集「エコロジー都市」（1991.3）
No.20 特集「新・集合住宅論」（1991.6）
No.21 特集「新・リゾート論」（1991.9）
No.22 特集「都市と商業空間」（1991.12）
No.23 特集「都市の民俗誌」（1992.3）
No.24 特集「都市と緑化」（1992.6）
No.25 特集「公共建築のデザイン」（1992.9）
No.26 特集「都市と高層ビル」（1992.12）
No.27 特集「住宅の間取り」（1993.3）
No.28 特集「都市と広告」（1993.6）
No.29 特集「都市の上水道」（1993.9）
No.30 特集「都市の保存」（1993.12）
No.31 特集「ミュージアムと都市」（1994.3）
No.32 特集「プレハブ住宅」（1994.6）
No.33 特集「都市の色彩」（1994.9）
No.34 特集「観光都市の条件」（1994.12）
No.35 特集「都市と下水道」（1995.3）
No.36 特集「マンションのメンテナンス」（1995.6）
No.37 特集「都市と歩道空間」（1995.9）
No.38 特集「ゴミとリサイクル」（1995.12）
No.39 特集「住宅の水まわり」（1996.3）
No.40 特集「都市の駐車空間」（1996.6）
No.41 特集「橋のデザイン」（1996.9）
No.42 特集「建築と木材」（1996.12）
No.43 特集「輸入住宅」（1997.3）
No.44 特集「都市と学校」（1997.6）
No.45 特集「環境共生型まちづくり」（1997.9）
No.46 特集「都市と情報化」（1997.12）
No.47 特集「老いない住宅」（1998.3）
No.48 特集「都市と駅舎」（1998.6）
No.49 特集「住宅のコスト」（1998.9）
No.50 特集「路面電車ルネサンス」（1998.12）
No.51 特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう―集客都市へ」（1999.3）
No.52 特集「シルバー・ハウジング」（1999.6）
No.53 特集「NPOとまちづくり」（1999.9）
No.54 特集「地域のノード、公共施設の新潮流」（1999.12）
No.55 特集「都市公園の未来」（2000.3）
No.56 特集「まちづくりの新しいパラダイム」（2000.6）
No.57 特集「島のまちづくりに学ぶ｜沖縄編」（2000.9）
No.58 特集「地域に開く大学」（2000.12）
No.59 特集「危機管理のまちづくり」（2001.3）
No.60 特集「保存―都市と建築、過去と未来をつなぐもの」（2001.6）
No.61 特集「30代建築家の都市イメージ」（2001.9）
No.62 特集「使う建築、使うまち―都市のストック活用法｜国内編」（2001.12）

●シンポジウム｜都市は「ストック・アンド・リニューアル」の時代｜田原幸夫＋八木雅夫＋宮脇勝＋三船康道
●ケーススタディ｜都市のストック活用法
●ルポ｜「空き地」「空き家」を利用しよう―アートプログラムとまちづくり
●登録文化財制度を活かす―伊豆修善寺「新井旅館」
●連載｜都市を拓いた人々・37 大津

No.63 特集「LETS的まちづくり」（2002.3）
No.64 特集「『都心居住』のまちづくり」（2002.6）
No.65 特集「都市はアートで刺激される」（2002.9）
No.66 特集「ランドスケープ・デザインの新展開―地形を活かしたまちづくり」（2002.12）
No.67 特集「スローライフとまちづくり」（2003.3）
No.68 特集「サステナブルな都市“成長”政策―都市計画と長期ビジョン」（2003.6）
No.69 特集「吉祥寺―住みたい町ナンバー1の理由」（2003.9）
No.70 特集「緑の建物づくり」（2003.12）
No.71 特集「都市と観光、新たな視点」（2004.3）

●ルポ｜果たして都市は観光資源となりうるのか―まちづくりと観光
●ケーススタディ｜まちづくりは観光地づくりか｜昭和30年代の「どこにでもある町」が観光客で大賑わい?!―大分県豊後高田市／そのままの“砂浜”や“ラッキョウ畑”が観光資源に?!―高知県幡多郡大方町／「運河論争」以降に華開いた「観光地・小樽」に「地域」とつながる新たな兆し―北海道小樽市
●ご近所ツアー｜「谷中」町歩きの愉しみ
●鼎談｜谷中の「観光」について、ひとつじっくり考えてみようか｜日端康雄＋片山和俊＋椎原晶子
●ルポ｜東京に「アミューズメント温泉」が増殖している理由（わけ）
●データベース消費時代の「観光」を考える。｜秋山綾
●エッセイ｜旅のあたらしい足音―群島で学び逸れながら｜今福龍太

No.72 特集「構造改革特区とまちづくり」（2004.6）
No.73 特集「マルチプル／モビリティ コンパクトシティの条件」（2004.9）
No.74 特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市［論］の現在」（2004.12）
No.75 特集「マルチモーダルが都市を楽しくする［ヨーロッパ編］」（2005.3）
No.76 特集「路地・横丁空間からの都市再生」（2005.6）
No.77 特集「公共空間、新たな視点」（2005.9）
No.78 特集「小さな町の豊かな暮らし」（2005.12）

●インタビュー｜イタリアの魅力的な小さな町｜陣内秀信
●ルポ｜ヨーロッパのコンパクトシティ―小さいながらも愉しいわが町
●サーベイ｜発見!「小さな町の豊かな暮らし」―「観光」と「生活」を両立させる町、鎌倉vs金沢｜神奈川県鎌倉市―歴史と文化の多様性を生かした、魅力ある住みやすい町の追求／石川県金沢市―革新し続けるからこそ生き続ける伝統。観光と暮らしを両立する「加賀百万石」のまちづくり
●ルポ｜日本型コンパクトシティの現場を訪ねる
●コンパクトシティ、「賢い縮小」の必要性｜服部圭郎

No.79 特集「都市の「良質な」居住環境」（2006.3）
No.80 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❶」（2006.6）
No.81 特集「「安全・安心のまちづくり」を考える」（2006.9）
No.82 特集「エリア・スタディ・シリーズ「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」（2006.12）
No.83 特集「ジェイン・ジェイコブスの宿題」（2007.3）**重版**
No.84 特集「サイクリング・シティの可能性」（2007.6）
No.85 特集「地図とまち―見る・歩く・つくる」（2007.9）
No.86 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❷」（2007.12）
No.87 特集「「美味し国」の景観論―フランス、都市景観の新たな創造」（2008.3）
No.88 特集「美味しいまちづくり」（2008.6）
No.89 特集「都市を愉しむいくつかの方法」（2008.9）
No.90 特集「シュリンキング・シティ―縮小する都市の新たなイメージ」（2008.12）
No.91 特集「都市彩譜―まちのいろどりのふ」（2009.3）
No.92 特集「fun town―たのしい・かわいい・やさしいまちづくり」（2009.6）
No.93 特集「マチとムラの幸福のレシピ」（2009.9）
No.94 特集「創造のまちづくり」（2009.12）
No.95 特集「団地ルネッサンス」（2010.3）
No.96 特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」（2010.6）
No.97 特集「新しい公共交通～生活支援ネットワークへ～」（2010.9）
No.98 特集「下北沢から「都市」を考える」（2010.12）**在庫切れ**
No.99 特集「「学校」からのまちづくり」（2011.3）
No.100 特集「21世紀のまちづくり「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」」（2011.6）
No.101 特集「震災後の地域・コミュニティ・住まい―再生・復興への視点」（2011.9）
No.102 特集「交流住宅―新しい暮らしのかたち」（2011.12）

●座談会｜「交流」で実現する、豊かな暮らし｜小谷部育子×坂倉杏介×水谷紀枝×久保田裕之
●ケーススタディ｜「一緒に暮らす」さまざまなカタチ｜バウハウス高円寺／シェアプレイス五反野／ヒナタ大井町／大森ロッヂ／コレクティブハウス聖蹟／コーポラティブハウス
●ルポ｜東日本太平洋側地震津波被災地ルポ｜三陸の都市と集落を訪ねて［後編］岡本哲志
●連載｜都市を拓いた人々46宮崎｜福島邦成＋川越進｜橋橋と分県運動
●連載｜私の好きなまち・くらし1吉祥寺｜日端康雄

No.103 特集「時間に暮らす」（2012.3）

●対談｜日本人と住まい｜鈴木博之×隈 研吾
●ルポ｜「ストック住宅」の可能性 尾道空き家再生プロジェクト＋ブルースタジオ＋優良ストック住宅推進協議会
●連続インタビュー｜つづく家づくり❶ 総有論の射程、つづく家づくりの唯一の解決策｜五十嵐敬喜
●ルポ｜「営み」としての住まい 京町家、大阪長屋から「暮らし」の継承を考える
●連続インタビュー｜つづく家づくり❷ 都市のなかの「時」と「間」、時間に暮らす知恵｜後藤春彦
●連載｜震災Report1｜被災者と支援者をつなぐ、オープンなプラットフォームをめざす きたかみ震災復興ステーション
●連載｜都市を拓いた人々47小樽｜広井 勇｜日本の港湾土木の父
●連載｜私の好きなまち・くらし2村上（新潟県）｜林 泰義

No.104 特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」（2012.6）
No.105 特集「「町おこし」新潮流―地域に埋もれたコンテンツを発信する」（2012.9）
No.106 特集「子どもの空間とまちづくり」（2012.12）**在庫切れ**
No.107 特集「シティホール―市庁舎の新潮流」（2013.3）
No.108 特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」（2013.7）
No.109 特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」（2013.11）
No.110 特集「都市とサイン」（2014.3）
No.111 特集「自由が丘―暮らしやすさの秘密を探る」（2014.7）
No.112 特集「新しいパートナーシップ―PPP＞PFI＞コンセッション方式」（2014.11）
No.113 特集「新しい図書館」（2015.3）
No.114 特集「空き家―家と暮らしと地域のこれから」（2015.7）

●連続インタビュー｜日本の空き家、現状と課題｜1・制度の隘路に生じる「空き家問題」｜浅見泰司／2・日本の空き家と住宅市場｜米山秀隆／3・世代間継承がうまくいけば空き家問題は解決する｜山下祐介
●ケーススタディ｜「空き家」からの地域再生｜神奈川県横須賀市―軍港をのぞむ、傾斜地の空き家対策／長野県佐久市―累積成約数全国1位を誇る「空き家バンク」／東京都世田谷区―空き家・空き部屋を、人と地域をつなぐ、まちづくり拠点に
●ルポ｜遠くの空き家を見守り、管理する
●連載｜スキマファイル・5｜歴史のある町にスキマあり!
●連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く・5｜青山すぎのこ保育園／はとぽっぽ保育園
●岩手県立高田高等学校新校舎落成記念式典「高田高校再建、岩手県の復興シンボルに」

No.115 特集「酒とまちづくり」（2015.11）
No.116 特集「ロスト近代と都市の未来」（2016.3）
No.117 特集「建築とまちづくり」（2016.7）
No.118 特集「空き地カルチャー　多孔質都市の可能性」（2016.11）
●ケーススタディ｜空き地が育む、自然と食とコミュニティ｜東京都練馬区 みどりのまちづくりセンター／東京都日野市 七ツ塚ファーマーズセンター／東京都世田谷区 農の風景育成地区／千葉県柏市 カシニワ制度／千葉県千葉市 手づくり公園まさご
● レポート｜佐賀発、「空き地」から始まるまちづくり
● 対談｜スポンジ化から見えてくる、本当の豊かさ｜小泉秀樹×山崎亮
● 連載｜スキマファイル・9｜吉祥寺、なぞの三角スキマを探して。
● 連載｜子どもたちの「笑顔」に会いに行く・9｜ろりぽっぷ泉中央南園／てんじん保育園

平成28年度研究助成公募課題決定

今年度実施の第26回研究助成には49件（一般研究34件、奨励研究15件）の応募がありました。
1月に開催した審査委員会で8件（一般研究6件、奨励研究2件）を選定し、3月の理事会において決定いたしました。
助成対象となった研究課題は次のとおりです。

平成28年度研究助成対象課題（応募受付順・敬称略）

	研究課題名	助成金額
一般研究	長期的持続的観点からのスマートシティ評価指標の開発と我が国への適用 長山 浩章（京都大学国際高等教育院 教授）	150万円
	固定資産評価基準の法的性格に関する基礎的研究 安部 和彦（国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科 准教授）	135万円
	アメリカ人口減少都市におけるネイバーフッドを基盤としたソーシャル・イノベーションのメカニズムに関する研究 仁科 伸子（熊本学園大学社会福祉学部 准教授）	140万円
	集合住宅の多様な改修事例のデータベース構築を通した良好なストック形成に関する研究 山田 あすか（東京電機大学未来科学部建築学科 准教授）	150万円
	平成28年熊本地震における被災マンションの被害実態と復興への課題に関する研究―阪神・淡路大震災及び東日本大震災と比較して― 中迫 由実（熊本大学教育学部 講師）	135万円
	建築の著作物の著作物該当基準に関する研究 諏訪野 大（近畿大学法学部 教授）	135万円
奨励研究	旅行者の安全確保のための空き家活用等による防災ネットワーク構築への試み 藤井 容子（香川大学工学部 助教）	75万円
	土壌汚染対策法の執行過程に関する公共選択分析 川瀬 晃弘（東洋大学経済学部 准教授）	80万円

information

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、平成25年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所（認定こども園を含む）に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「緑の環境プラン大賞」に取り組んでいます。

●ホームページ　http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/

購読のご案内
年3回（7月・11月・3月）発行、頒価500円＋送料
定期購読は諸般の事情により受付を終了しました。毎号内容（PDF）をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧になり、ご希望の号をお求め願います。

city&life no.119 Mar-Jun 2017
2017年3月発行

企画委員　日端康雄（慶應義塾大学名誉教授）
陣内秀信（法政大学教授）
大村謙二郎（筑波大学名誉教授）
小泉秀樹（東京大学教授）
小野文夫（当財団常務理事）
佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）

編集・発行　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社アルシーヴ社
斎藤夕子

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社恒陽社印刷所
頒価500円・送料215円

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life no.119 Mar-Jun 2017